

姉に憑依したシスコンは、妹を愛で尽くす

rick@吸血鬼好き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ただシスコン姉が表向きは常識人の妹を愛でるだけの短編集のよ  
うなもの。

勢いと自己満足で書いたただのレミフラ小説。

R15の過度なGLにご注意を。

レミフラ愛が抑えきれなくなった時だけ気まぐれに投稿します。  
なので、レミフラ等で面白そうなシチュがあればTwitterとか  
活動報告で教えてください（

# 目次

## 本編

1話「シスコン」	1
2話「寝起き」	5
3話「寝巻き」	9
4話「おやすみ」	15
5話「お買い物」	19
6話「バレンタイン」	25
7話「お遊び」	29
8話「記憶」	39
9話「門番」	45
10話「味」	49
11話「お風呂」	54
12話「風邪」	57
13話「魔女」	61
14話「残留」	65
15話「知識人」	68
16話「嫉妬」	71
17話「発散」	74
番外編	
番外編1「狂依存」	78
過去編	
18話「過去——切っ掛け」	84

## 本編

### 1話 「シスコン」

——レミリア??物語の始まり——

私は所謂、転生者という者である。気付いたら死んでいて、気付いたら転生していた。『転生』という言葉はよく聞く話だが、実際にあるとは、ましてや自分の身に起こると思つてなかつた。だけど、今では本当にそう思つてたのか分らない。前世の記憶は曖昧で、今世も小さい時の記憶はほとんど無い。だけど、今の私にはしっかりとした感情がある。それは多分、前世からある者に対して持つていた感情であり、今世のお陰でより強まった感情——俗に言う『恋愛感情』だ。

私が転生した先は『東方Project』というゲームの世界。私は昔から、そのゲームに出てくる、とあるキャラが好きだった。今世でそのキャラに転生する事も、憑依する事も無かつたが??運良く、そのキャラにとても近い者に転生できたのだ。

私が転生した者の名前はレミリア・スカーレット。そのゲームでは言わずと知れた紅魔館の主であり、紫がかつた濃い青い髪と綺麗な紅い瞳を持つ吸血鬼の少女である。少女と言つても、原作だと500を超えららしいが。まあ、その時点で十代前半でも小さい部類に入らうの低身長らしいから、見た目だけなら少女どころか幼女と言つても差し支えない。

そして、私の好きな者が——

「フーラーンっ!」

「??何? お姉様」

——レミリアの妹である悪魔の妹ことフランドール・スカーレット。通称フランである。金髪のサイドテールにレミリア??私と同じ紅い瞳を持つ。私より若干身長も胸も小さく、美しい綺麗な肌。まるで可愛らしいお人形さんのような姿を持つフランに、私は恋してる。百合だとか、シスコンだとか、そんなのは気にならない程に私は妹の事が好きだ。

それに今世の私は既に人間達の侵略によって両親を亡くした。館に残ったのは召使いと唯一の肉親のフランのみ。それでもつて可愛いものだから、好きにならないはずが無い。??だからといって恋愛感情を持つのはおかしいかもしれないけど??気にしたら負け。前世からフラン妹が好き。だから、愛してる。それで良いだろう。

「ねえ、一人でそんな暗い地下に居ないでさ、私と一緒に遊びましょう?」

「??イヤ。お姉様つてさ、無駄に暑苦しいんだよね。それに必要以上にスキンシップするし」

「だけど、妹の方は少し違うらしい。所謂『反抗期』つてやつかな。小さい時は「遊んでー」とか「お姉様大好きー」とか言ってくれたのに。今では甘えるような言葉は一切無く、罵倒こそ無いものの素っ気ない。100歳にもなったら恥ずかしいのかな。」

「必要なのよ?。最近フランつたら何も話してくれないし??親睦を深めるためにも、ね?。」

「逆なんだよなー。親睦深まるどころか浅くなってるんだよなー」  
「うーん??どうしてかしら?。」

「原因は誰かさんの過度なスキンシップじゃない?。」

「明らかに私の事だろうけど、そんなに酷いかな。姉妹の一線を超えるようなところには触ってないはずだ。もちろん、いつかは姉妹の一線を超えてみたいけど。」

「『酷いかな?』みたいな顔してるところ悪いけど、酷いから。頭だけならまだしも、胸とかお尻も触るし、手つきはいやらしいし、触る時間間も妙に長いし」

「えー??普通だと思うのだけど」

「お姉様の普通は普通じゃない。??ね、早く帰ってくれない?。早く本の続き読みたいんだけど」

「むう??。分かったわ。また明日来るわね」

「ご機嫌ななめなフランをこれ以上刺激して怒らせるのは避けたい。仲が悪くなれば、どうやって仲直りすれば良いのか私には分からない。私は今まで、そういう道を避けながらフランと接してきたから。」

姉としてはどうなのかという話だが、嫌われたくなかった。??もしかしたら、それが原因で嫌われたのかもしれない。

「おやすみなさい、フラン。愛してるわよ」

「??うん。おやすみ」

フランと別れの挨拶を告げ、地下を後にした――

――フラン??レミリアが帰った後――

「??お姉様ー? レミリアお姉様ー?」

お姉様が帰ってしばらくした後、確認を取るためにお姉様の名前を呼ぶ。お姉様なら、聞こえたらすぐに飛んでくるはず。それが来ないという事は、近くには居ないという証拠。それにお姉様は『おやすみ』と言ったから、いつも通りなら明日まで来ないはず。

「??お姉様アアアア! 好きイイイイ! あー、もう我慢できないっ!  
! 愛してくれるって言うてくれた! 私なんかの事、愛してるって!  
! 幸せ! なんであんなに可愛いのか!? 言葉もその美しい容姿も、  
何もかもが直球過ぎて可愛いっ! もうっ、好き好き好き好き好き??  
ほんと、だーい好きっ! お姉様に触りたい! 吸血したい! つ  
いでに夜這いしたい! 翼とか首筋とか、全部はむはむしたい! は  
むはむしたいっ!!」

欲望を口に出して、高揚して我慢できなくなった気持ちを落ち着かせる。たまにこうして発散しないと、欲望が爆発して自分でも何をしてしまうか分からなくなる。それでお姉様を襲ったら、絶対に嫌われる。だって、妹が姉を愛するなんて普通じゃないから。お姉様は表にバンバン出してくるけど、多分あれは地下に引き籠る私を外に出そうとしてるから。過度なスキンシップも発言も、全ては本心なわけな

い。お姉様は倫理観はズレてるけど、常識はちゃんと持ってる。

だから、私が普通じゃない行動を取れば嫌われる。お姉様って小心者なのに無駄にプライドが高いから、それを傷付けるような真似をすれば怒るし、傷付くに決まってる。

「はー??落ち着いたー。??お姉様、怒っちゃったかな。突き放すような事言っちゃったし??」

そして、私にも問題がある。いざお姉様を前にすると、緊張と焦りで突き放すような言葉を使ってしまう。そんな言葉を使っても毎日こんな薄暗い地下に来てくれるお姉様には感謝という言葉しか浮かばない。だから、より一層好きになったんだけど。

本当は私に好かれたお姉様が悪いから、責任を取ってもらいたい。なのに、それをすれば嫌われるから我慢しないといけない。いつも抑えてばかりだから、いつかは爆発させたい。

将来はお姉様と結婚したい。その頭から足の爪先まで、全て私の物にして愛したい。最後には、あんな事やこんな事まで??。想像するだけで楽しみだ。でも、いつそんな日が来るんだろう。どうすればそういう未来になるんだろう。

「お姉様あ??お姉様ア??!」

枕をお姉様に例え、全身を使って抱き締める。想像だけでは完全に落ち着けないが、何もしないよりはマシだ。むしろ、今こうしてるからこそ落ち着けるといふもの。??力加減しないと、すぐに壊れちゃうけど。

「お姉様??明日も絶対に来てよね、大好きだから。??そして、今度こそ、好きって言うんだからっ」

心にそう誓い、お姉様の夢を見る事を祈って、瞼を閉じる――

## 2話「寝起き」

——フラン??レミリアの部屋にて——

いつも通りの日暮れ。ただ、いつもと違う事が1つあった。

「お姉様。ご飯の時間だよ。??お姉様? お姉様——!」

ご飯の時間だと言うのに、お姉様が起きてこなかった。いつもは私よりも早く起きて、私の分だけ「手料理を食べさせたい」と作ってるのに。寝るのが遅かったのか、今日は珍しい事に私よりも起きるのが遅かったらしい。だから、ご飯もできてない。

流星の私でも、ご飯を食べないと元気が出ない。いざという時——お姉様に襲われた時とか——に対応できないから、お姉様を起こしに来た。

「あと??10分??」

「はあ? そう言って私が何度も何度も起きないの見てきたでしょ!

お姉ちゃんらしくそこはしっかりしてよね! って、言ってる私も恥ずかしくなるけどっ!」

どれだけ揺さぶっても反応が薄い。起きてる時とは大違いだ。?? そうだ。もしかしたら、今の寝惚けてるこの状況なら、触ってもバレないかな。き、ききき??キスとかしても??怒られたりしないかな。やってみる価値はあるかもしれない。だって、こんな状況、なかなか無い。

「お、起きないでよ、お姉様??」

そつと目を閉じ、お姉様の唇に自分の唇を近付ける。それが触れるまで後どれくらいかかるだろう。そんな事を考えながら、胸の高まる鼓動を必死に抑えながら、慎重に、ゆっくりと近付け——

「ふわああああ??!」

「——っ!? あ、お、おおお、お姉様?!!」

急にお姉様の声が聞こえ、慌てて離れる。そして目を開けると、ちようどお姉様の目と合った。どうやら、ちようど目を開けたみたいだから、本当にギリギリセーフだったらしい??。危なかった。

「ふえっ??? あれ、フラン???」



「そ、そうだよ。なかなか起きないから起こしに来てあげたの。感謝してよね」

「フランう??!」

「え、ちょ——」

この姉は何を考えてるのか、急に抱き着いてきた。どうやら寝惚けてるらしい。私はベッドへと引き込まれ、逃げられないようにか足を絡められる。最初、何が起きたのか理解できなかった。けど、すぐさま我に返り、引き剥がそうと必死にお姉様を押しして抵抗した。

「ちよつ、バカ姉! 寝惚け過ぎだつて!」

「ふらあん??。私が??守つて??あげるからね??」

「おねっ??! ??うー」

それは、私が無理矢理にでも引き離そうとした時だった。私は抗うのをやめ、お姉様に身を委ねる。しかし、幸運なのか不幸なのか。抱き締める以上の行為をされる事は無かった。

お姉様は卑怯だ。いつもみみたいなヤラシイ行為じゃなくて、姉らしい優しく温かな抱擁。そんな事をされ、しかも「守る」なんて言葉をかけられたら、逃げるに逃げられない。いや、逃げたくないがより正確な言葉だ。

「ふらあん??好きいい??」

そうだ。ただの変態な姉なら、私が好きになるはずない。たまにこうして、優しく、自慢できるような姉になるから、私が好きになったんだ。それでも度が過ぎる行為はどうかと思うけど、今ではそれも嬉しく感じてる。それだけ私の事を思ってくれてるといふ証拠だから。

「あ、れ? フラン? え、あつ! ご、ごめんなさい??!」

「??ああ、起きたんだ。別にいいよ。何もされてないから。あーあ。ようやく抜け出せたなー」

後もう少して一線を超えるかも、というところで完全に起きちやつた。後一步というところだったのに、とても残念だ。ホント、お姉様は空気が読めない。良い意味でも、悪い意味でも。

「き、嫌いになつてない? 大丈夫?」

「大丈夫だよ。それより早く起きてご飯作って。アレが無いと、元気出ない」

「っ！ わ、分かったわ！ 今すぐ作るわね！」

言葉一つで人はここまで元気になれるのか。そう思うくらいの勢いで、お姉様は部屋から出ていった。

そして私は、お姉様が完全に離れた事を確認し、お姉様のベッドに倒れ込んだ。

「??あ、あぁー！ だ、抱き合っちゃった?! 抱き合っちゃったよお?!」

だ、大丈夫。落ち着けフランドール??. お姉様はもう気にしてない感じだった。だ、だから、嫌われてはない??. それどころか、ワンチャン距離が縮まった可能性も???. ああ、ダメ！ 思い出すと恥ずかしくなってくる??. へ、平常心平常心！」

こんな顔をお姉様に見られたら、もう明日から生きていけない。恥ずかしさで死んじゃいそう??. それにしても、お姉様のベッドっていい匂いがするなあ。お姉様の匂い、とつても落ち着く。このまま堪能して、寝ちやいたいくらい。

「って、私は変態お姉様か! ??はあ」

自分で突っ込むとなんだか情けなくて、哀れになってくる。いつか愛し合う仲になるかもしれないのに、こんな事で恥ずかしがってたら、後が思いやられるのに。??あ、愛し合う仲って、あ、あんな事やこんな事をするのかな。

うわあ、絶対に私じゃ耐えられない気がする。恥ずかしくなっていて、またお姉様を突き放すような事言っちゃいそうな気がする??.

「そ、それでも??お姉様に、また抱き締められたいなあ??. お姉様の柔らかい身体、もつと味わいたかったなあ??.」

欲望を口にしないと、この抑えきれない気持ちをどうにかできない。こんな事になったのも、全部お姉様のせいだ。絶対にいつか、責任を取ってもらおうそうしよう。でも、まずはもつと距離を縮めよう。話も色々な事もそれからだ。

「??っ、次は私がお姉様に起こされよつかな。そ、そしたら寝惚けてた、って事で何しても??い、いや。絶対ダメだ。起きた後、恥ずかし

さで絶対死ぬ。お姉様としばらく顔合わせれなくなる??。はあ、諦めてご飯食べに行こつ。お姉様に心配かけちゃうし」

悩みを忘れ、気持ちを切り替えて、私はお姉様の待つ食堂へと向かった――

### 3話「寝巻き」

——レミリア??浴室前、脱衣所にて——

レミリアに憑依転生し、フランという妹を持った時から考えてた事がある。

「ふーらーんっ!」

「??何? お風呂はさっき入ってたよね? また待ち伏せ?」

それを実行するために、わざわざフランが風呂から上がってくるのを待っていた。しかし、残念な事に私の待ち伏せを見越してか、部屋に入った時には既に下着を着ていた。

本当に残念だけど、着てなければ理性がぶっ飛んでもおかしくなかったから、ある意味では良かったかもしれない。まあ、今よりもっと小さい時は気にせず一緒に入ってたんだけど。

「いいえ、違うわよ。これ見て、じゃーん!」

用意してた寝巻きを見せ、反応を伺う。そう、考えてた事とは、フランにある寝巻きを着せる事である。フランはいつもクマさんの絵が描かれた子供っぽい服を着てる。子供らしくて可愛いというものもあるけど、私的にはもう少し大人っぽくて、色っぽい服を着てほしい。そして、可能なら一緒に寝てほしいと思ってる。

「うわあ??。嫌な予感はしてたよ。うん。でも、一応聞いわ。何それ?」

予想通り、トーン低めで、凄く嫌そうな顔をしてる。でも、ここで引いては夢を1つ諦める事になる。嫌われたくないけど、多少は強引にでも服を着せなければ。もし無理だったら、諦めるしかないが。

「見ての通り、紅のネグリジエよ。フランって子供っぽい服を着てるじゃない? だから、ちよつと大人になってみないかなあ、って思ったの」

「魂胆が見え見え。いい加減にしないと、本気で怒るよ?」

「えっ!? あ、あの??(ぎゅ)、ごめんなさい??」

フランに怒られたら、当分立ち直れなくなる気しかしない。ここは諦めるしかない。嫌われたくないし、怒られたくもない。まあ、変な

ところ触って、よく怒られてるけど??。

「??はー、ガチで悲しそうな顔しないでよ。冗談だよ。着るだけならいいよ。でも、自分で着るからね?」

「え、ええー! それでいいわ! ありがとう、フランっ! ??あっ」

あまりの嬉しさに、思わずフランに抱き着いてしまった。慌てて離れ、フランの顔色を伺った。

「??どうかした? さ、まだ髪も乾かしてないし、先に部屋で待っててよ」

「わ、分かったわ」

表情1つ変えない。さほど気にしてないようで、内心ホツとした。それと同時に、何も思っていないのだと、残念な気持ちもあった。フランは本当に、私をただの姉としか見てないのだろう。

「じゃあ??部屋で待ってるからね」

「うん。??すぐ行くよ」

その場を後にし、私は1人で部屋へと急ぐ。服を大切に手にして。

「お待ちせ」

10分程でフランは部屋へとやって来た。いつも通り、クマさんの絵柄が描かれた服を着て。

「さ、どの服を着てほしいの? 別にお人形さんってわけじゃないけど、たまには別の服も着てみたいの。まずはお姉様チョイスで。それから私は選ぶから」

「え!? い、いいの? じゃあ、私とお揃いのベビードールとか——」

「透け過ぎ。却下。っていうか、さっき見せたネグリジエでいいじゃん。着るだけだけど。なんで別の服を見せるかなあ」

ワンチャン了承してくれるかと思ったけど、考えが甘かった。見せただけで速攻断られた。

「うー??。じゃ、じゃあ、さっきのネグリジェでいいわよ??」

「凄い残念そうだね??。ま、気にしないでいいや」

「えっ!?!」

と、わざわざ私の目の前で服を脱ぎ捨て、着替え始めた。妹の珍しい行動に、私は思わず声が出た。フランはそれに反応する事なく、黙々と着替えていく。

「こ、ここに着替えるの?」

「んー?。何か悪い?」

「い、いえ。その??私が言うのもなんだけど、目の前で大丈夫かな、って」

「??あー。そゆことね」

何かを察すると、フランは白い下着を残し、その場に服を脱ぎ捨て、私と面と向かって話し出した。

「ほら、どう?。いつも触ってる妹の身体だよ?」

「え?。どうって??正直に言ってもいいの?」

「いいよ。どう思う?」

フランの求める答えは分からない。だけど、小さな胸に、くびれに、綺麗な鮮やかな金髪に??。残念なところなど、1つも見当たらない。まるでダイヤモンドのような完全な身体。

ただ、心の奥底から可愛いと、美しいと思う。それ故に、私は今ここで間違いを犯してしまう気すらする。それを必死に堪え、フランの問いに素直に答える。

「可愛い??凄く可愛い」

「ふーん。襲いたい、とかじゃないんだ。なら、大丈夫だね。風呂でもそうだったけど、今日はそこまで酷くないっぽいし、わざわざ移動して着替えるのも面倒だからここでもいいよ。それに、一応は姉妹だから」

姉妹??それこそが、フランと付き合えないという、私の一番悩んでる事だが、フランは気にしてないのだろう。いつか、フランにも私の

気持ちを知ってほしいけど、やはり、姉妹だからという理由で拒絶されるだろうか。フランと姉妹という枠組が、嬉しいと同時に厄介この上ない。

「へー、結構楽でいいじゃん。お姉様、どう？　可愛いでしょ？」

着替え終えたフランは見せびらかすように一回転して、笑顔でそう聞いた。あまりの可愛さに興奮して鼻血でも出そうだ。稀にしか見れないフランの笑顔を、まさかこんな時に見れるとは思わなかった。

「ふふっ。ええ。とつても可愛いわ。流石、自慢の妹ね」

「自慢の??そつか。うん！　ありがとう！」

もしや、今日私は死ぬのか？　フランがこんなにも笑顔を見せてくれるなんて。いつもなら考えられない。いつもは多くて2、3回程度なのに。??それにしても、本当に可愛い。このまま抱き締めて、離したくない。もっと愛を深めたい??。

でも、今はまだその時じゃない。急がば回れとも言うし、ゆっくりと、着実に距離を縮めよう。

「フランが断った時も考えて、シンプルにTシャツとシヨールパンとかも用意してたんだけど??気に入ってくれたなら良かったわ。今年の誕生日プレゼント、まだあげてないから、それでいいかしら？」

「そう言えば、そうだったね。もう何ヶ月も前の事なのに、まだ覚えてたんだ。いいって言ったのに。ま、ありがとう。お姉様に新しい寝巻き貰えたいし、私からも、何かあげないとねー」

フランからの??プレゼント!?

その言葉を聞いただけで自然と笑みが零れてくる。自然と、嬉しい気持ちでいっぱいになる。

「い、いいのよ?　別に何もくれなくても」

が、こういう時に自分から求めては却って心象が悪くなり、貰えなくなる。本当は今すぐにでも貰いたいが、我慢して――

「あ、そう?　ならやめとこっかなー」

「え!?!　あ、あの??」

「??建前なんていいから、本音は?」

「欲しいです。私にプレゼントを下さい、お願いします、フラン様」

土下座までしてねだる。フランは私の魂胆など、こじと悉く見破ってるらしい。すると、フランは安堵とも嘲りとも取れない不思議なため息をついた。

「珍しくまともで、プライドの無い正直なお姉様を見れて嬉しいよ。じゃ、今回だけ特別に一緒に寝てあげるね。でも、お触りは禁止だからね？」 触ったら、触った腕を破壊するから」

「ひ、ひええ??。わ、分かったわ」

「ふふん。さ、もう夜明けも近いし、一緒に——あつ」

フランは先ほどその場に脱ぎ捨てた服に足を取られ、バランスを崩して私の方へと倒れ込んだ。私はフランを慌てて受け止めようと前が出るも、受け切れずにフラン共々後ろに倒れてしまった。

「いったあ??。あ、ごめん、大丈夫!」

「大丈夫よ。それより怪我は無い?」

「??お姉様が守ってくれたから大丈夫」

「そっか。なら良かったわ」

フランが怪我をすれば、それこそ嫌われる時くらいの発狂ものだ。幾ら吸血鬼で傷の治りが早いと言っても、フランは女の子。可能な限り、傷を付けさせたくない。

「??ずっとこのままだと重いよね。ごめん、すぐ退くね」

「重くないわよ。フランだから」

「ふふん。何それ。面白いね。さ、気を取り直して寝よっか。??それと、やっぱり、イヤらしくしないなら、ちよつとくらい触ってもいいよ。本当にちよつとだけね」

「??え?。いいの?」

今、フランは何と言ったのか。もしかしてだけど、少しだけ、本当に少しだけ私を受け入れてくれたのだろうか。という事は、夢にまで見た、同意の上でのお触りが??。あ、流石にお尻とか胸とかはダメか。触ろうものなら、絶対腕をきゅつとしてドカーンされる。未だにされた事はないけど、絶対にされる気がしない。

「いいよ。私達、姉妹だから??ね?」

「え??ええ。そうね。姉妹ね??。私、フランの姉になれて良かったわ」



「急にどうしたの？ 変なお姉様。あ、もう少し詰めて。にしても、お姉様のベッド広いね。2人でも、広々と眠れるよ」

共にベッドに寝転がり、数秒程、顔を見つめ合う。すると、フランが両手を広げ、爽やかな笑顔を向けてきた。

「ほら、お姉様。来ていいよ。今日だけ、今日だけだから??」

「え、ええ。??フラン、ありがとう」

私を求めするように手を広げるフランの中に入っていく。すると、手を背に回され、抱き締められ、フランの方へと寄せられる。妹と布1枚を挟んで密着している。その初めての感覚に、心音が高まり、胸に触れなくても鼓動が早くなるのが分かる。気付かれない事を祈りながら、同じようにして、そっとフランの背に手を回した。

「??おやすみなさい、フラン」

「うん、おやすみ。お姉様」

この幸せな時間を無駄にしたくない。その気持ちとは裏腹に、あまりの心地良さに深い眠気が私を襲う。そして、いつの間にか、私は深い眠りへと落ちていた――

## 4話「おやすみ」

——フラン??レミリアの部屋にて——

どうしよう。つい思わず、やってしまった。お姉様があんなに優しくしてくれたから。プレゼントまでくれたから。そのお返しという使命感から、後先考えずに一緒に寝ようとか言っちゃった。

それどころか、高ぶった感情を抑えきれず、思わずお姉様を抱き締めてしまった。更にはお姉様も優しく抱き締めてくれたから、今になってようやく自分がどれだけ恥ずかしい事をしてるのか分かった。

お姉様の胸が私の胸に当たってる。服を挟んで密着してる。それだけに、自分の胸の鼓動がヤバイ。お姉様の耳はいいし、胸に脂肪なんてほとんど無いから、いつ気付かれたっておかしくない。

「フランう??!」

「え??。ほっ、寝言か??!」

とか思ってたけど、割と早く寝たらしい。変なところを触られるのも覚悟してたのに、今日のお姉様はどうしたのだろう。私が言う事を聞いて、ネグリジエを着たから、機嫌が良いのかな。もしそうなら、ちよつと嬉しいかも。

ん? もしそうなら、実はお姉様も私の事が??。流石に無いか。ただ、プレゼントを受け取ってくれた事が嬉しかっただけだろう。お姉様の事だし、深い事は考えてない可能性の方が高いし。

「それにしても??可愛い。お姉様、好きだよ??!」

お姉様が寝てるのをいい事に、小さな声で呟いてみる。もちろん反応は無いけど、言葉を発する度に自分の顔が熱くなってくる。聞かれてないと分かっているけど、目の前に居るとやっぱり恥ずかしい。

「フランう??!」

「んー、また寝言? ふふん、可愛いお姉様。どうしたの?」

寝てるのと知ってれば、面と向かって話すよりも些か心に余裕が持てる。私は冗談っぽく呟き、寝ているお姉様の反応を伺った。

「??結婚、しよ??!」

「??え?」

余裕を持てると思った側から、その余裕を奪うような発言が聞こえた。いや、多分気のせいだろう。幾らお姉様と言えど、そんな言葉を発するはずがない。きつと、いや絶対に空耳だ。

「結婚??ずつと、一緒に??居たいの??」

追い打ちをかけるかの如く、お姉様はその言葉を連発する。心臓の鼓動が更に早まるのを感じた。恥ずかしくて、思わず枕に顔を埋める。それでも、お姉様の手から逃げようとは思わなかった。いや、お姉様から逃げたくなかった。

「け、結婚つて??。うー??。お姉様のバカ。絶対分かって言ってるじゃん??」

本当は分かっている。ただの寝言だという事も、お姉様の本心じゃないという事も。それなのに、どうしてこんなにもお姉様の寝言に動揺を隠せないのか。決まっている。お姉様が好きだからだ。お姉様が好きだから、お姉様から逃げたくないし、そんな言葉を言われると恥ずかしくなるんだ。

「??フラン、大丈夫、夫??」

「??」

お姉様はいつもそうだ。心を見透かしてるかのように喋って、心を乱すかのように触って、私を揺さぶってくる。だから、私も気持ちを抑えられなくなるんだ。これも全て、お姉様の計略だろうか。否、そうに違いない。

「分かったよ、お姉様。??寝てる時くらい、受け入れるね??」

思い通りになりたくないけど、気持ちを発散させるためには致し方ない。そう思っ、身体を捻って再びお姉様の顔を見る。そして、決意を固め、その唇に一瞬だけ自分の唇を触れて、啄むようなキスを交わした。そして、思い切っ、お姉様を強く抱き締め返す。

先ほどよりも強く、そしてより一層密着する。触れる肌から、自分の心音かと勘違いする程大きく、お姉様の心臓の鼓動が聞こえる。そのまま数秒程抱き締めた後、ふと我に返って少し離れた。

「??や、やっちゃった。ふあ、ファーストキス??お姉様と、ファーストキス??」

お姉様を起こさないよう、声を殺して感嘆の声を出す。お姉様は気付いてないが、ついに私は、姉妹という枠組みを超え、お姉様との距離を1歩だけ進めた。言うなれば、それは禁忌。私は近親相姦という禁忌に手を出しかけているのだ。

「すうー、ふうー??。落ち着け、フランドール。わ、私は元からお姉様の事が好きだったんだから、これくらい普通じゃん??。べ、別に??ううーっ!」

「??ふああああ??あ、れ? フラン? まだ起きてたの?」

悶えてる時に、運悪くお姉様が目覚めてしまった。目が虚ろで、完全には起きてない事が幸いか。

「え、あ、う、うん??。ちよつと、眠れなくて??」

「そつか??。なら、寝かせてあげる??」

お姉様が抱き締めながら、まるで子供をあやす様に、背中を優しく叩き始めた。小さな声で何か歌ってるが、それが何かはよく聞こえない。平常心を保てれば聞く事もできただろうが、今の私にそんな心を保てる程の余裕は無い。

お姉様に意識されて抱き締められるという事が、自分で誘った時よりも恥ずかしいという気持ちのしかかる。その気持ちを紛らわすために、もう何もかも壊れる事を覚悟して、間違いを起こしてもいい気すらしてきた。

「何か考え事でもしてた?? 困った時は、お姉ちゃんに??頼っていいから??」

「っ?! うん、分かった。??お、お姉ちゃん??」

いつもみたいなの、よそよそしい呼び方じゃなくて、親しい姉に使える呼び名。それは暗に、更に距離が縮まった事を意味する。その言葉を聞いた瞬間、私の心は安らかな思いで満たされた。お姉様の優しい声が、その安らぎをもたらしてくれた。

今日だけで、どれだけの距離が縮まったのか。いつか、お姉様がしっかりと起きてる時に、本心を打ち明けよう。それで拒否されたら、その時はその時だ。

でも、まだもう少しはこのままの関係で良いよね。もう少し、

お姉様の本心を知りたいし。ほ、本心を知るのが怖いとかじゃないけど。

「フラン??おやすみ??」

「うん。??お姉ちゃん、おやすみなさい」

今はともかく、お姉様??お姉ちゃんのお陰で落ち着いたから、また気持ちが高ぶる前に眠るとしよう。

そう思っ、お姉ちゃんの腕の中でゆっくりと目を閉じた――

## 5話「お買い物」

——レミリア??人間の街にて——

今日は尽きた食料を調達するために、フランと一緒に人間の街にやってきた。そのついでに、他の色々な物も買いに来た。何を買うかは決めてないから、見て決めるつもりだけど。

フランを連れてきた理由は2つある。1つは容姿をフランが新しく覚えたらしい魔法を使って変えているから。彼女が居ないと気軽に歩けない。どうしてそんな魔法を覚えてたのかは知らないけど、本人は言おうとしないし、こうして役に立ったのだから、深くは聞かないつもりだ。

2つ目は、家に1人で居させたくないから。家には頼れる人も居ないし、何かあればすぐに向かえない。そろそろ原作キャラである美鈴が来てもおかしくないのに、まだ来てない。1人で何処かに行くには、まず美鈴が居る事が前提になる。2人でもっと外に出かけられるように、早く来てほしい。

「ふーらーんっ！ どう？ あれって綺麗な衣装じゃない？」

「??そうだね」

それはともかく、初めて2人で買い物に行くのに、フランの機嫌がよろしくない。どうしてかは??まあ、うん。察しがつく。

「それよりさ、人前でこんなにも腕にしがみつくてどうかしてると思うよ。周りから変な目で見られるし、すつごく恥ずかしいんだけど??」

「そうかしら？ みんな可愛い姉妹だなあ、とか思ってるんじゃないかしら」

「そうだといいいね??」

フランは可愛過ぎて、変な男に捕まる可能性がある。だから、離さないようにしてただけだけど??フランにはそれが逆効果だったらしい。無闇に引っ付き過ぎたせいで、フランが恥ずかしそうに周りを気にしてる。

姉妹なんだし、そこまで気にする必要は無いと思うんだけどなあ。

「フラン、楽しいわね」

「??別に、楽しくないし」

「うーん??本当に機嫌悪いわね。帰った後、いつもみたいにいチャイチャヤする?」

「いつもしてないし。つていうか、もう少し離れて」

いつも以上に冗談に手厳しい。それに段々周りの目も痛くなってきたし、そろそろ手を繋ぐ程度に抑えよう。これ以上やって、フランに嫌われるのも嫌だしね。

「え???」

「あら、どうかした? もしかして、手を繋ぐよりもしがみつく方が良かったかしら?」

「ぼっ?! ち、違うからっ! 私は??あ。あのお店が気になったからだよ、うん」

あからさま過ぎて、本当に凶星だったのかと思ってしまった。でも、流星にそれは有り得ないし、不意に話しかけたからビックリしただけだろう。凶星だったなら、両思いなのになあ。繋ぐ事は許されてるから私としては全然嬉しいんだけど。

「ふーん。??洋服屋? さっきは服に興味無さそうにしてのに、おかしいわね?」

「???」

「え、あ、謝るから、手に力込めないで! い、痛いから、ストップ! ストッププリーズ!」

「ふんっ。??お姉様つてさ、私よりも弱いのにいつも馬鹿みたいな事して、私に怒られてるよね? そういうのが好きなの?」

若干トゲのある言い方。矛盾を指摘したせいで、機嫌を損ねてしまった。こういうところは子供っぽいのに、質問自体は子供とは言えないもの。どうしてこんな性格になったのか。やっぱり、私のせいなのか。

「??フランにされるなら、何でも好きよ。貴女はたった1人の家族なんだから。嫌いになるわけじゃないじゃない」

「ふーん??変態さんだね」

「うっ。フランだけよ？ こんな気持ちになるの??」

「余計酷いわ。妹なんだよ？ ??ま、一途なのはいいんじゃない?」

「ほえ？ ??うん、そっか。そうね」

今日初めて、フランに褒められた気がする。もちろん、フランにその気があるわけじゃないだろうけど。ただ純粹に、そう思ってるだけだろう。

「??あら、これ可愛いわね」

会話をしながら通りかかったある店で、可愛い紅のシユシユを見つけた。いつもはリボンで髪を留めてるけど、フランなら何でも似合うはずだ。だから、フランに付いたら、もっと可愛くなりそうだ。

「おじさん。これ幾ら?」

「おっ、可愛い嬢ちゃん達じゃねえか！ いつもは銀貨数枚だが??お安くしとくよ!」

「あら、ありがとう」

この容姿だとみんながオマケしてくれるから嬉しい。大好きなフランの姉になれたし、オマケはしてくれるし、前世では見なかったような願ったり叶ったりだ。

「ところですよ。嬢ちゃん達、姉妹かい？ 見たところ、髪の色も違うが??かなり似てるねえ」

「いえ、恋人よ」

その言葉を発した瞬間、フランが横で私の腕を強く握り締めた。これはかなり怒ってる。言葉を間違えたと察した私は、咄嗟に言葉を訂正した。

「ふっ。冗談よ。ええ、姉妹よ。私が姉で、この娘が妹なの」

「はえー。仲の良い姉妹で結構！ 銀貨1枚でいいよ!」

「ありがとう、おじさん」

銀貨を手渡し、シユシユを受け取る。その場でフランに付けようと顔を見ると、どういうわけか、顔が真っ赤に染まっていた。やっぱり、言葉を間違えて怒らせてしまったようだ。

「フラン、付けていい?」

「勝手にしなよ??。もう、早く帰りたい??」



「ご、ごめん。すぐ終わるから??はい、終わったわ」

既に付けていた髪留めを外して、代わりに紅のシユシユを髪に付けた。少し距離を置いてフランを見ると、当たり前前というか、何とか。一言で言うならまるで女神のようだった。私に癒しを届けてくれる可愛い女神。この女神を独り占めしたい。そんな独占欲が湧いてくる。

「??お姉様。帰ろっ！歩くの疲れたからっ！」

「ええ、分かったわ。ごめんなさいね、買い物に付き合わせちゃって」「別にいいよ。もう過ぎた事だから、何も言わない」

おう??ご機嫌斜めだ。私は楽しかったから良かったけど、今度はフランの気持ちも考えて行動しよう。こんなはっちゃけた行動をしようと、いつフランに嫌われてもおかしくない。それもこれも、フランが可愛過ぎるからいけないんだけど。

「??お姉様。またいつか来ようね」

「え？ ??ええ、そうね」

その真意は分からない。だけど私は、その言葉が聞けて悩みを全て忘れる程、嬉しい気持ちになった。まるで、デートしていたかのような錯覚に陥る。それくらい、嬉しい思いを今日はできた——

——フラン??人間の街にて——

初めてお姉ちゃんと外に出かけた。この日のために人間に化ける魔法を覚えていて良かったとつくづく思う。だけど、こんな大衆の前で私の腕に引っ付くのはどうなのか。夜だから目立たないけど、それ以上に人が多いという問題がある。

近くを通った人間達はみんな私達をチラ見するし、デートって楽し

いものって本で見たのに、これじゃあ見世物にされてるみたいで気分が悪い。もちろんデートというのは私が勝手に思ってるだけで、本当はただの買い物だけだね。

もちろん、お姉ちゃんは引きこもり気味な私を元気づけるためか、周りの視線なんか気にせずによってるんだけど。私のためを思っているのは分かるけど、少しは自重してほしい。じゃないと、あまりの恥ずかしさで死にそうだ。この恥辱の鬱憤をどこで晴らせばいいのやら。

「??あら、これ可愛いわね」

お姉ちゃんがそう言っって手に取ったのは紅のシユシユ。私の手を繋いでる方とは逆の手でシユシユを手に取り、じつくりと見ていた。そして、私をちらりと見て、またシユシユに目を戻す。その後、お店のおじさんに値段を聞いていた。

あれは明らかに私に付けようとしている。じゃなきゃ、私を見たりなんかしない。所謂、プレゼントという物かな。デートなら、こういうのも買ったりするのかな。

「ところでよ。嬢ちゃん達、姉妹かい？ 見たところ、髪の色も違うが??かなり似てるねえ」

言われてみれば髪色がこうも違うのはどうしてなんだろう。私は親を見た事ないから分からないけど、どっちかが青色でどっちかが黄色なのかな。ま、別にどうでもいいんだけど。顔だけでも、お姉様と似てるって言われて嬉しいし。

「いえ、恋人よ」

「??え」

お姉ちゃん聞こえるか聞こえないかの声量で思わず言っってしまった。お姉ちゃんの言葉を聞いて思わず手に力が入る。

お姉ちゃんと、恋人？ で、ででで、デートといえば、恋人とするもの。確か、本にはそう載っていた。なら、そんな事を言われても動じる事は無い。当たり前じゃないか。お姉ちゃんと恋人なんて、当たり前??。

いや。そもそもこれはデートじゃなくて、買い物だった。私は何を

言ってるんだ。こ、混乱してきた。ヤバい、どうしよう。どうやって、平静を装えばいいんだろう。どうすれば、お姉ちゃんと今の関係をキープできるんだろう。

「ふふっ。冗談よ。ええ、姉妹よ。私が姉で、この娘が妹なの」

よ、良かった。やっぱり冗談だったか。??それでも、なんでだろう。胸がまだドクドクと音が鳴ってる。お姉ちゃんのせいで、もうどうすればいいか分からない。これ以上、何かあれば平静を装える気がしない。

「フラン、付けていい?」

この姉、追い打ちをかけてきやがった?。もしかして、私の心は見透かされてる?。もしそうなら、私は全て諦めるよ?。今までのプライドも思考も全部投げ出して、お姉ちゃんに襲いかかるよ?。

「勝手にしなよ?。もう、早く帰りたい?」

「ご、ごめん。すぐ終わるから?。はい、終わったわ」

諦め口調で言っちゃったけど、本当にすぐに終わったらしい。何も考えずにじっとしてたら、いつの間にか終わっていた。どうやら、見透かされてるわけじゃなく、単なる偶然だったらしい。よくよく考えれば当たり前だけど、今の私は神経が凄くすり減ってる。また何かある前に、早く帰ろう。

「??お姉様。帰ろっ!。歩くの疲れたからっ!」

「ええ、分かったわ。ごめんなさいね、買い物に付き合わせちゃって」  
「別にいいよ。もう過ぎた事だから、何も言わない」

別に嫌だと思ったくないし、そもそも早く帰りたいからもうどうでもいい。凄く疲れた。でも、最後にあれだけは言っておこう。じゃないと、もうこうしてお姉ちゃんと一緒に何処かに行けない気がする。

「??お姉様。またいつか来ようね」

「え?。??ええ、そうね」

温かい言葉。聞いてるだけで癒される。デートじゃなかったけど、今日は楽しい思いができた。今度こそは、デートとしてお姉ちゃんと一緒に??何処かに行きたい。そんな事を空想しながら、お姉ちゃんの手を強く握り締めた――

## 6話 「バレンタイン」

——レミリア??紅魔館のキッチンにて——

今日は待ちに待ったバレンタイン!

前世の記憶から、バレンタインという日が愛する人にチョコを渡す日だと知ってた私は、その事をそれとなくフランに伝えた。そして、密かに人間の街で材料となるチョコを集め、バレンタインの下準備を終えた私はチョコの制作に取り掛かっていた。

毎日のようにフランの分の料理は作るものの、デザート系は1つも作った事がない。特段作りたいと思った事が無いのもあるが、何よりもフランが自分から求める事が無かったのだ。妹にグロい行為をさせないために料理を引き受けてただけで、それ以外の理由で作ろうとは今まで思わなかった。

だが、今日だけは違う。今日は愛する人にチョコを送る日。なら、作らないわけにはいかない。

「ふうー??:。意外と難易度高いわね??:」

図書館から持ち出した料理本を読みながら、片手で持つフライパンでチョコを溶かしていく。

「ふあく。眠??:っ」

フランに悟られないように早く起きたせいでちよつと眠い。が、フランの事を思えばこのくらいなんて事は——

「——あつ!?! や、やっっちゃったあ??:」

グラニュー糖を入れるところで、寝惚けて塩を入れてしまった。本当に馬鹿な事をした。あれだけ注意してたはずなのに。夕食と一緒に作ろうと似た容器に入れた塩を置いてた私が馬鹿だった。

「はあ、マジか??:」

とりあえず、失敗した物をフランには渡せない。気持ちを切り替え次に挑もう。

そう決意して、再びチョコを調理始めた——

——フラン??紅魔館にて——

お姉ちゃんに聞いた話だけど、今日はバレンタインという特別な日らしい。お姉ちゃんからその話をされた時は耳を疑ったが、本で見るとバレンタインという特別な日がある事は確かだった。チョコに関する云々は書いてなかったけど。

それを知った私はお姉ちゃんからチョコを渡される事を想定し、逆にビックリさせようと、昨日一人で街に行つてチョコを買つてきた。本当は手作りチョコを渡したかつたんだけど、私は料理した事無いし。下手なチョコを渡すよりは、しっかりしたチョコを渡した方が良いと思つたからだった。

「フラン、ご飯美味しかった?」

「うん、美味しかったよ。いつも通りね」

例の如く、起きてすぐの夕食の後に料理の感想を聞いてきた。いつも美味しいと答えてるのに、心配性なお姉ちゃんだこと。そんな可愛い姉が好きなんだけど。

「そう、良かったわ。??ねえ、今日は朝ご飯以外にも用意してる物があるの」

「今は夕方だから朝ご飯じゃなくて夕ご飯ね。で、何? 用意してる物って」

驚かせるためには、知らないという体で話した方が驚きが大きい。要はいつも通りだ。自分を騙して、大好きなお姉ちゃんも騙して。ま、嫌われるよりは遥かにマシだ。騙すという行為に多少は悪い気がするけど。

「じゃーん! バレンタインチョコよ!」

後ろに隠してたチョコを見せびらかす。お姉ちゃん曰くチョコだけど、ガトーショコラにしか見えない。手作り感を出すためにそつち

にしたのかな。もしそうならとても嬉しい。

「バレンタイン??。ねー、食べていいの?」

「もちろんいいわよ。フランのために作った料理だから」

「じゃ、いただきます」

フォークを突き刺し、取り出した欠片を口に入れる。噛んだ瞬間、甘い香りと味が口全体に広がった。美味しさと最愛の人からのプレゼントという幸せで食が進む。あつという間に平らげた私は、フォークを置いてお姉ちゃんに向き直る。

「??うん! 美味しい! ありがと、お姉様」

「ふふつ、良かった。そう言ってもらえると嬉しいわ。最初は失敗しちゃったけど、作った甲斐があった」

「え? 失敗したの? お姉様が?」

お姉様が料理を失敗するなんて珍しい。そう感じて、思わず口に出してしまった。

「ええ、そうよ。意外だった? まあ、失敗は成功のもと。結果的にフランの笑顔が見れたから、私はそれでいいのよ」

「変なお姉様。本当にそれだけでいいの?」

「いいわよ。ただの自己満足だけど、私はそれでいいの」

「??悲しい事言うんだね、お姉様って。そんなんじゃこれあげれないな」

「へっ?」

懐からチョコの小包を取り出し、お姉ちゃんに見えるようにして見せびらかす。それを見たお姉ちゃんは、一瞬だけ固まると、口をぱくぱくさせて動揺していた。まさかこんな顔をするとは思わなかったから、珍しい顔を見れてとても嬉しい。

それと同時に、バレンタインの意味を知ってるせいで、ずっと心臓が鳴って緊張してる。??誤解されないように、訂正だけしておくか。「いつもご飯とか作ってもらってるお礼だよ。あつ。べ、別に愛してるからあげるって意味じゃないからね!」

「????」

「??あれ、お姉様? お姉様!」

あまりの驚きにか、そのまま後ろに倒れてしまった。心配して駆け寄るも、その顔は至福に満ちていた。見たところ傷は無いから、一先ずは一安心だ。

「ふ、フランからのバレンタイン??バレンタイン??ふふっ、ふふふふ」  
凄く幸せそうな顔だ。私から貰ったチョコ、そんなに嬉しかったのか。万が一にでもそうだったのなら、私も嬉しいな。

「ちよっ、気持ち悪いって。??ま、今日だけはいつか。ここに置いてくから、後で感想聞かせてよ。チョコのね」

「ええ?! ありがとうね、フラン！」

「??気にしないでいいよ。ただのお礼だから」

そう言っつて、内心ドキドキしながらも、倒れるお姉ちゃんを放って部屋へと戻る。

ちなみに、後日聞いた感想によると「とても美味しかった」らしい

## 7話「お遊び」

——フラン??紅魔館にて——

「フーラーンっ！ たまには一緒に遊びましょう！」

普段と変わらない1日。夕食を食べた後、部屋に帰るとすぐにお姉ちゃんが遊びに来て、なんの前置きも無しにスキンシップをする。いつも通り、酷くなる前にそれを手で払い、お姉ちゃんへと向き直る。

「変なところ触らないで。??怒るよ?。」

「あ、ごめんなさい??。で、でも、遊ばない?。」

いつもなら払っただけで諦めて遊ぼうともしないのに珍しい。何か心の変化でもあったのかな。私としても本当はお姉ちゃんと遊びたい。でも、スキンシップされた直後は変な気持ちになる。それを我慢したいから、いつもは断ってる。だけど、今日はなんだか気分が良くてそんな気持ちもないし遊びたい。

「ま、いいよ。何して遊ぶ?。」

「えーつとね、王様ゲーム」

「??へ?。」

聞き間違いかな。王様ゲーム? 2人で?

「あ、王様ゲームって知らないかしら?。」

「いや、知ってるけど。あれって2人でできないよね?。」

「大丈夫よ。命令する方とされる方が分かるだけだから」

それだと王様ゲームの面白味が無いような気もするけど。でも、お姉ちゃんの事だし、何か考えがあるのかな。つて、待てよ。もしお姉ちゃんに命令権がある場合、どんな命令をされるのか。そもそも、どうしていきなりこんな遊びを提案してきたのか。謎が多い。

「??どうして急にしようと思ったの?。」

「王様になったら教えてあげるわよ?。」

「それじゃ私不利じゃん。命令を1つ消費する事になるし。教えてくれないと遊ばないよーだ」

「なら仕方ないわね。フランが乗り気ならするつもりだったけど、そうじゃないなら無理には言わないわ」



それを言われると逆に気になる。もしここで引き返せば一生答えてくれない気がする。それに、どうしてだろう。お姉ちゃんの顔が少し寂しそうに感じる。??いつも私の恥ずかしいという身勝手な気持ちで突き放してばかりだったし、たまにはいいかな。

「はー??分かった。いいよ、やっても」

「本当に!? 良かった?!? なら、ルールを説明するわね!」

機嫌が戻るの早過ぎる。もしかして、私を騙したのかな。お姉ちゃんって意外と狡猾だし、有り得ない話でもない。こうなったら、相手の土俵に乗ったも同然。どうすれば??。

「じゃんけんして、負けた方が相手の命令を一度だけ何でも聞く。それを5回繰り返すっていう遊びね!」

「勝ち負けないし、ガバガバ過ぎる。最早遊びじゃないよね?」

「でも、理由を知りたいからやるでしょ?」

「??ま、やるけどさ」

要はお姉ちゃんのルールで戦えと。好きな人や自分より弱い人相手なら力づくで聞き出すのに。不幸か幸いか、お姉ちゃんはどうつちにも当てはまる。だけど。勝負事ならお姉ちゃんに負ける気はしない。いつも勝ってるし、今回だけ負けるとかそんな事は絶対はない??はず。

「分かったわ。約束ね。じゃあ、早速1回戦を始めましょう!」

「え? 心の準備とか精神面の——」

「最初はグー! じゃんけん?!?」

「えっ、ちよっ?!?」

あまりにも早過ぎる展開に付いていけず、咄嗟にグーを出す。が、直後にお姉ちゃんのクスクスと抑えた笑い声が聞こえた。そこで察したものの、確認のためにお姉ちゃんの手を見る。そこにあったのは大きく開かれたお姉ちゃんの右手だった。

「ふふっ。私の勝ちね。じゃあ、何を頼もうかしらねえ」

「??お姉様ズルいよ」

「あら、そうかしら? 何を出すのか分からないのだから、ズルいも何もないじゃない?」

「それもそう??あつ」

今思い出した。お姉ちゃん的能力、運命を操るとかいう胡散臭い能力だったんだ。という事は、わざと急かして私が取れる行動を制限して、狙った運命にしたんじゃ??。あれ、それって私の勝ち目ないじゃん。

あいや。想像以上にヤバイ。悪魔だから契約とかか約束を途中で反故する事もできない。かと言って、勝つ事もできない。完全にお姉ちゃんの手のひらの上だ。

「??ちつ。騙された。あーあ。もうやになつちやう。さ、早く命令するならしてよ。だけど、後で覚えてなよ」

「えっ。ちよ、ちよつとフラン? 遊びなんだから、そんなに本気にならなくても??」

「ズルしてるよね? っていうかさ。私が勝負受けるのも想定済みだったでしょ。運命操って、絶対に受けるようにしたでしょ?」

「そ、そんな事ないわよ?」

私と目を合わせない。これは確信犯だ。いつにも増して積極的。こんなお姉ちゃんは見ただ事がない。一体何がそうさせたのか。誰か性格反転剤でも食べさせたとか? お姉ちゃんに悪いけど、そんな事しか思い付かない。

「??ま、いいや。後で覚えてて。で、何命令するの? 早くしてくれない?」

「え? そ、そっか。命令よね??」

そう言っただけ、お姉ちゃんは黙り込む。だけど、見たところ考えてる様子もなく、ただ言うか言わないかで迷ってるようにも見えた。「??早く言っつて。触りたいなら触ればいいし、脱がしたいなら脱がせばいい」

「ちよ、流石にそんなに変態じゃないからね!」

「なら、早く言いなよ。何を言うのに困る必要があるの?」

流石の私でも、なかなか話してくれないお姉ちゃんにもどかしさを感じた。正直言っつて、どうしてここまで頑なに言わないのか分からない。

「??は、ハグして」

「ん？」

「は、ハグよ。ただ、ぎゅーってしてほしいの??」

え？ 何この人可愛い。ふふっ、ぎゅーって、ぎゅーって何よ。まるで子供みたい。ああ、可愛過ぎてさっきのイライラも忘れちゃった。もう何でもいいや。お姉ちゃんに命令にされるがままに従おう。そう思って、無言でお姉ちゃんを抱き締める。その刹那、お姉ちゃんには動きが固まるも、すぐに私を抱き返してくれた。とても温かく、家族愛を感じる。

「あ??フラン、ありがとう??」

「ううん。気にしないで。命令されてしてるだけだから」

「??ごめんね。我慢できなくて」

「え??」

我慢？ 我慢ってどういう事だろう。お姉ちゃんは何を我慢してたんだろう。何も我慢してるようには見えなかったし、お姉ちゃんが我慢するような思い当たる節も無い。

「??ありがとう、もういいわよ」

「もういいの?」

「ええ、いいの。さあ、次よ。最初はグー。じゃんけん??」

1回目とは打って変わって、落ち着いた声で掛け声を出す。しかし、結果は1回目と全く同じでグーを出した私の負けだった。

「はー??。やっぱ無理か。次は何すればいいの？ あ、今回だけは何しても許してあげるよ。今までちよつと強く当たり過ぎてたしね。それとき、何か我慢してたんだよね？ 私で良ければ、相談に乗ってあげるよ。ただ1人の家族なんだから」

「??ごめんね、フラン。またハグしてちようだい」

「え？ い、いいけど??」

二度も同じ命令に多少戸惑うも、言われるがままにお姉ちゃんを抱き締める。再び身体が触れ合い、変に気持ちが高揚する。

「??お姉様、何がしたいの?」

「??寂しいの。ずっと、ずっとずっと??。寂しくて、淋しくて、悲しく

て、辛くて。生まれて200年以上経った。その間、ずっと耐えてきたけど、もう我慢できないの?!」

涙目になってお姉ちゃんは私の目をじっと見つめる。

「フラン、よく聞いて。これ以上我慢して、絶対に嫌われるような襲い方するよりも??この際、嫌われるのを覚悟で言うわ」

「襲うって??な、何言ってるの?」

「今だけは黙って聞いて。??フラン。愛してるわ、貴女の事」

衝撃的な言葉に、困惑と同時に嬉しさを感じた。有り得ないと思つてた。ただ、私を元気づけるために??最大の禁忌を犯した私が悲しまないように、今まで接してたと思つてた。だけど、違つたんだ。

「200年以上も進展しないんじや、好きじゃなくてもおかしくないけど??。ふ、フランは??どう? 私の事??嫌いじゃない?」

「ふ、ふつ??ふふふ。あはははっ! そこは『嫌いじゃない?』じゃない?『好き?』でしょ?」

「??え?」

自分の気持ちを伝えるために、お姉ちゃんの背中に手を回して優しく抱き締める。

「我慢させてごめんね。代わりに質問には答えてあげる。嫌いではないよ」

「え、それって??」

「何? 質問にはちゃんと答えたよ? 『嫌いじゃない?』って質問にはね」

「えっ、あつ。わ、私の事?!」

「だーめ。ほら、後3回も残ってるよ? じゃんけんで勝って命令したら?」

お姉ちゃんは顔を顰め、頬を膨らませる。可愛い顔だ。それに、久々にとつても嬉しい思いをした。まさか、両思いだったなんて。これ程嬉しい事は一生に一度あるかどうかだ。今、一度あつただけだ。

「いいわ。ほら、早く出しなさい。じゃんけん?!」

「グー! ??あつれ。私が勝っちゃったね?」

「あれ??。あ、ミスった??」

運命操作でもミスったのかな。まさか勝てるとは思わなかったけど、勝てて良かった。これで、さっきの2回分の仕返しができる。ま、どっちも同じ内容だし、悪い思いはしなかったけど。負けた事自体が悔しいし、気にせずやり返そう。

「??お姉ちゃん。今からある事をするんだけど、抵抗せずに10秒だけじっとしてて。もし抵抗したら、次のじゃんけんでわざと負けてね」

「そ、そんな命令アリなの?」

「ガバガバルール作ったお姉ちゃんのせいだよー」

「だ、だけど! ??って、え? お姉ちゃん?」

2回目でようやく気付いたんだ。やっぱり、鈍いお姉ちゃんだなあ。そういうところも、私は好きだけど。

「ささっ、早くじっとして」

「わ、分かったけど、一体何を——っ!」

じっとするお姉ちゃんに対して、肩を掴んで無理矢理唇を奪う。あまりの衝撃にか、お姉ちゃんは数秒だけ動けずに固まっていた。が、10秒経つよりも早く我に返ると、私の肩を押しして抵抗した。

「あはア??。やっちゃったね? わざと負けてね。次はグーを出すから」

「ぐ、ぬぬ??。わ、分かったわよ! はい、チョキ! 私の負けね!」

お姉ちゃん、どんどん適当になってる。それだとつまらないなあ。もつと可愛くて、困り果てた顔を見てみたい。だけど、それよりも??。「命令する前に確認するけど??多分さ、このゲームに誘ったのって寂しくて我慢できなかったからだよね?」

「ええ、そうよ。最近フランに触れてないし、これ以上我慢して爆発すればフランに嫌われると思って??」

確かに拒み過ぎた。それは私も認める。でも、普通は触らないからね。姉だろうと、妹の身体を隅から隅まで触るなんて普通じゃないからね。そこは人前に出て恥ずかしい思いをしないようにしないと。多分、誰かの前だと恥ずかしくてまたお姉ちゃんを拒絶するかもだけ

ど。

「そつか。??なら、お姉ちゃん。触って落ち着くなら、自由に触つていいよ。これ命令ね」

そう言つてベッドに後ろから倒れ込む。抵抗しない意思を示すように手足を広げ、体を楽にする。お姉ちゃんは無防備で大好きな妹に、どんな反応をして、どんな行動に出るのか。とても楽しみだ。

「??来ないの？ 早くしてくれないと、興奮めしちゃうんだけど」

「???」

意を決したお姉ちゃんは、私の上に覆い被さるようにして乗つてきた。腕を掴まれ、逃げる事も拒む事もできない状況へと追いやられる。

「フランう??フランう??っ！ 好き、好き好き好き好き！ 一生私の傍を離れないで！ ずっと、私と一緒に生きて！ 絶対に、何があつても離さないから、ずっと一緒に居て！」

「ふふん。重いなー。あ、そうだ。まだ最後、じゃんけん残ってるしやろうよ」

「そ、逸らさないで答えてよ?!」

話を聞いてくれなくて、悲しそうなお姉ちゃんの顔。見るだけで感情が高ぶる。悪魔の性なのかな。それを見ると、もつといじめたくなる。

「命令で言わせれば？ あ、手を使えないし、口で言つてね」

「うー??分かったわよ。やればいいんでしょ？ ほら、最初はグー。」

「じゃんけん??グー！」

「??負けちゃったね」

ぶつきらぼうになりながらも最後のじゃんけんを始める。結果はチョコキを出した私の負け。多分、また運命操作をされたんだと思う。予想はしてたし、それで何か言おうとは思わない。卑怯なのが悪魔だしね。

「さ、何をしたい？ 答えさせる？ それとも??無防備な妹に何かするの?」

「いいえ、そんな事頼まないわ。フラン、今日は一緒に寝ましょ?」

意外な誘い。そう言えば、子供の時はよく一緒に寝たのに、最近はずかしくて一緒に寝てなかった。姉妹だからって色んな場所に触るお姉ちゃんにも責任はあったけど。

「うん、いいよ。でもさ、まだ深夜だよ？ 仕事はどうするの？」

「休んじや??」

「ダメ。放っておいたらどんどん溜まっちゃうよ?」

「??分かったわよ。やればいいんでしょ、やれば。すぐに終わらせて戻ってくるわ」

そう言っ私から離れて起き上がり、お姉ちゃんは部屋を立ち去ろうとする。

「どうしたの？」

「2人っきりの時だけさ、お姉ちゃんって呼んでもいい?」

「散々言っおいて今更？ 2人っきりなのは どうして？」

「だっ恥ずかしいじゃん」

そう言っとお姉ちゃんは頭を傾げ、不思議そうな顔をする。どうしてそんな顔になるんだろう。

「いやいや、恥ずかしいよね？」

「そうかしら？ でも、貴女の好きなようにしていいわよ。自由になんか」

「そうだよ。ま、自由にさせてもらうね」

「ええ。??それじゃあ、行っってくるわね」

「うん。行ってらっしやい」

今度こそ立ち去るお姉ちゃんの背を見ながら、私はベッドに倒れ込む。

「??よっしやアアアア！ お、お姉ちゃん??お姉ちゃん??! うっわ、恥ずかしっ。私恥ずかしっ!でも、ふ、ふふふ??!」

そして、今までの行動を振り返っ枕に顔を埋めた――

——レミリア??翌日、紅魔館にて——

「ふあああああ??。あ、れ?。」

「ひゃっ!」

夕方。いつもの時間に目覚めると、見慣れない天井が目に入る。ここは何処かと思考するよりも先に、手に柔らかい感触を感じた。それと同じくして、小さな悲鳴が上がる。

「??お姉様。変なところ触らないでよ」

声の聞こえた方を見ると、フランが顔を赤くして頬を膨らませていた。完全に怒っていて、言葉を間違えば痛い目を見る事は火を見るより明らかだった。

「へ? ??あつ! ご、ごめんなさい??」

「もうっ、わざとじゃなさそうだし、今回だけだからね」

「はい??. それはそうと、どうして私、ここで寝て??」

「??昨日、お風呂上がった後、疲れてたのか勝手に入ってきてそのまま寝たんだよ? 仕事頑張ってたのは見て分かったから、許してあげたけど。それも今回限りだからねー?」

あれ、そうだったか。??いや。私が聞きたいのはそうじゃないはずだ。確かに疲れてたけど、だからといって、フランの部屋に勝手に入るわけない。そうだ、思い出した。今私が持つ記憶は、夢なんかじゃなかったはずだ。私は、昨日——

「お腹空いたしき、早くご飯作ってよ」

「ねえ、フラン!」

「??どうしたの?」

私の声に歩みを止めたフランは、ゆっくりと振り返って爽やかな笑顔を見せる。

「また、一緒に寝てくれないかしら?」

「??考えとくよ。お姉ちゃん」

「そう??. えっ? い、今なんて?!!」



「さあねー。お姉様、早く来なよー」

「ふ、フラン！ ちよつと話を聞い??つ。もう！ 少しくらい待ちなさいよー！」

心に残る幸せの余韻に浸りながら、楽しそうに走り去るフランを追って、私はフランの部屋を後にした――

## 8話「記憶」

——レミリア??過去の記憶、紅魔館にて——  
私は一体いつからフランが好きなのか。

その問いに、私は迷わずに前世からと答えるだろう。前世から好きな「キヤラ」。私はフランの事をそういう風に見ていた。だけど、今世を生きて、考え方が変わった。愛おしくも可愛く、たまにキツく当たっても、後で優しくしてくれる。今でも若干ツンデレが残るも、飴と鞭がしっかりした大好きな妹。最早、私は妹の虜になってしまったのだ。

では、その考え方はいつ変わったのか。

それに明確な答えを出す事はできないが、思い当たる節はある。それは、私が度々目にする夢だ。どんな夢か、起きた時にはよく覚えてない。だけど、見たという実感は残る。理由は多分、幸せな記憶だから——

「お姉ちゃん、お姉ちゃん!」

「ん??ふあ、ああ??。フラン? どうしたの?」

それは、まだフランが地下に閉じこもる前の話。中身も外見相応の歳で、今よりもずっと甘えてたあの時の記憶。部屋は隣同士でも違う部屋なのに、フランは起きるといつも私の部屋に勝手に入り込んでいた。

今回もその例の如く、私の部屋に勝手に入ってたらしい。そして、私の上でフランは飛び跳ね、半ば無理矢理起こされていた。だけど、重たくも痛くもないし、やられてる時は可愛いものだから、特段嫌な気持ちになる事はない。

「あさだよ！ おーきーてー！」

その時のフランは子供故か、舌足らずな部分が多かった。それでも一生懸命に言葉を伝えようとする姿は、見てると心を動かされる。いつもそれで心から身体へと感情が伝わり、行動へと移されるのだ。

「朝って??まだ寝る時間??！」

「おーきーてー！」

人間にとって朝は起きる時間だが、今の私は吸血鬼。吸血鬼からしてみれば最も忌み嫌う時間だ。そんな時間に何を思ったのか、フランは私の部屋へとやって来た。

「仕方ないわねえ??。起きたわよ。どうしたの?！」

「なにもないよー！」

「え、無いの?！」

「うんっ」

フランは純粹無垢な笑顔で、悪びれもせずそう話す。流石に何も無いのに起こされた私は怒りは感じなかったものの、多少の面倒という気持ちはあつたと思う。それでも可愛いから、数秒で何も思わなくなつてたけど。

「なら、どうして来たの?！」

「えっ??ひみっー」

「あらら。お姉ちゃんに教えてくれないの?！」

「??それなら、いっしょにねてもいい?！」

いつも部屋に来てるフランだが、今回ばかりは様子が違つた。その時の私も不思議には思つてたが、深く追求する事はしなかった。それが嫌われない方法だと思つてたから。

「ええ、いいわよ。可愛い妹ねえ」

「むう。ごどもあつかいしないでっ」

「ふふっ、ごめんなさいね」

「もう??！」

呆れた声を出しながらも、フランは私の隣へと入ってくる。毛布を被つた後、しばらく何も喋らなかつたが、フランはじつと私を見つめていた。

「どうしたの?」

「ううん??お姉ちゃん。だきしめて?」

「??え?」

そして、甘えた声を出し、私にせがんでくる。願ってもない状況に私は内心喜びに満ち溢れたけど、いつになく甘えるフランに疑問を抱いた。今ではツンツンしまくってるフランも昔は甘えていた。けど、いつもはここまで甘える事も無かった。

「なんどもいわせないで! ??だきしめて?」

ムスツとした表情からの恥じらいのある表情で、フランは再びせがんできた。自分の可愛さを熟知してるかのような行動に、私は思わず無言でフランに抱き着いた。

「お、お姉ちゃん? ちよつとつよい??」

「あつ! っ、ごめんさい。??可愛くて、つい」

「??ずっとこどもあつかいしてる。でも、ありがとう??」

顔を赤くして、子供らしく恥ずかしがる姿を見せるフランに、私は再び感情が高ぶった。必死に幼いフランを襲いたい気持ちを押し殺し、フランを抱き締めて気を紛らわせていた。

「??お姉ちゃん。わたしね、こわいゆめをみたの」

「怖い夢? ??それで私のところに来たの?」

「うん??。おかあさまやおとうさまが、しんじやうゆめ。まつかになつて、しんじやうの」

それを聞いて思ったのは、レミリアとフランの両親が原作に出てこない事。よくフランが生まれた時に死んじゃう、って話を聞くけど、私の世界線だけか、そんな事は起きなかった。だが、その代わりに私が10歳になつてもフランは地下に閉じ込められず、また能力も発現していない。

その時に想像した最悪な事態が——いや。これは思い出したくない。両親も良い人つてか吸血鬼だったし、フランもそんな両親の事が好きだった。だから、私も両親の事を守りたかった。だが、この時の私は、楽観的な考えを捨て切れずにいた。

「なるほどねえ??。それは怖かったわね。でも、大丈夫よ。みんな私

が守ってあげるから。お母様やお父様、それにフラン。貴女の事もね」

「??うん、ありがとう。そういつてくれるお姉ちゃん、すき」

「私も好きよ、フランだから。もうこのまま??ずっと一緒に居たいくらい」

「わたしも??:。お姉ちゃんといっしょなら、なにもいらぬ」

フランは稀に子供なのかと思う言葉を口にする。まだ人間でも子供と言われる年齢なのに、何もいらぬなんて子供が言うセリフじゃない。フランにもっと夢を持ってほしい。何か欲しい物を強請って、私にもっと甘えてほしい。今も昔も変わらず、そう思っていた。

「??そんな事言わないの。お姉ちゃん以外に、何か欲しい物は無いの?。」

「いまはないよ。お姉ちゃんといっしょにいるの、たのしいから！」

それにね、お姉ちゃんがすきだからー！」

「ふふつ。お世辞でもそう言ってくれと元氣が出るわ」

「おせじじゃないよー！」

「え?。」

どういう事かと、思わず口に出してしまった。フランは私の疑問を何も思っていないのか、それとも気付いてなかったのか、気にせず話を続けていた。

「わたしね、お姉ちゃんがすきだから、お姉ちゃんといっしょにしたいの!」

「??へ?。え、あ??け、結婚?。」

「うん、けっこん。お姉ちゃんといっしょにしたい??。できるよね?。」

「ふ、フランは??それでいいの?。私なんかで??」

私が最も悩んでいる事を、フランは純粋な質問として投げかけてくる。その時、私はどう答えていいか分からず、話を逸らすように逆に質問し返した。もし今されたとしても、私は答える事ができないだろうけど。

「いいよー。お姉ちゃんといっしょにして、えほんみたいに、お姉ちゃんをよびすてするのがゆめなの!」

「呼び捨て？ ああ、恋人みたいになつて事ね。別に今でもレミリアつて呼んでもいいのよ？ それで今の関係が変わる事も?？」

「かわるよ？ お姉ちゃんとかいびとになるから！」

「??？」

私の気持ちを知つてか知らずか、フランは更なる追い打ちをかける。結婚なんて姉妹だから普通じゃないのに。幼いフランはそれも分からず、子供らしく無邪気に願望を語つてるだけ。それなのに、私の気持ちは揺れに揺れていた。

「お姉ちゃん、だいききだよ。これからもずっとね！ だから、いつかけっこんしようね！」

「??うん。お姉ちゃん、フランと結婚できるように頑張るわね」

「がんばれー！ おうえんするから、ぜったいだよ！」

フランはどうしてこんなに可愛いのか。最早考えるのが馬鹿馬鹿しくなるほど、フランが可愛らしく、愛おしい。感情の高揚を抑えるために、その身体を改めて抱擁する。フランは多少苦しそうな声を出すも、力を緩めるとすぐさま抱き返してくれた。

「うん??絶対ね。約束よ」

「うん！ やくそく！」

その時はそれ以上、会話する事もなく、私とフランは仲良く一緒に眠つた。

思えば、この時からだった。フランからの告白で、私が改めて恋愛的な意味として、フランを好きになったのは。今思えば恥ずかしながらも奥手な私がフランに告白できるはずがなく、私はフランに後押しされる形で好きになった。そして、永遠に離したくないとも思つたのだろう。

「??様。お姉様！」

「んっ??フラン？」

私の気持ちはあの時から変わらない。フランに恋愛感情を抱いて、子供の頃の言葉を真に受け、未だに結婚したいと思ってる。

「お寝坊さんだね。早くご飯作ってよ。お腹空いた」

「ええ、今すぐ作るわ」

「もう、すっかりしてよね。お姉様ってホント、私がいないとダメだね」

フランの気持ちは分からない。好きとは言ってくれたが、それからというもの、然したる進展は見られない。最近では夢だったのかと勘違いするほどだ。

「ねえ、フラン。約束、覚えてる？」

「へ？ 約束って、いつの？」

「????いいえ。何でもないわ。ごめんなさい。気にしないで」

でも、時折。それが夢じゃなかったと感じさせられる時がある。

「ふーん。変なお姉??レミリアだね」

「ははは??って、え？ ふ、フラン！ もう一度だけ今の言葉——」

「私に二言はないよ。悪魔だしね。じゃ、そゆことで。食堂で待つとくね」

「あ、ちよっ?! もう??」

姉なのに、今でもフランに振り回されてる気がするが、それもまた一興。稀に欲求不満になる事もあるが、私はこの時間がずっと続けばいいと思ってる。そして、いつか。フランとの約束を叶えたい。

不変はつまらない事だから。多分、原作のレミリアも、変化を求めて幻想郷に行ったのだろう。なら、レミリアである私は、同じように変化を求めよう。形は些か??いや、かなり違うだろうけど。最近、私はそう思うようになってきた——

## 9話 「門番」

——紅美鈴??紅魔館にて——

人間の街から離れた位置にある、悪趣味な——失礼。目に悪そうな真つ赤な館。名は紅魔館。巷では悪魔の住む館として有名である。この館の主曰く、真つ赤で悪魔の住む館だから紅魔館らしいですが、その真相は前当主が死んだから分からないとか。正直、名前の由来なんてどうでもいいですが。

おっと、自己紹介を忘れていました。私の名は紅美鈴<sup>ホンメイリン</sup>。单身、修行の旅に故郷を出たものの、妖怪であるため人間の街に行く事もできず、食料も尽きて途方に暮れていた。そんな時に、この館の主であるレミアお嬢様に拾っていただきました。

それからというもの、働くという条件の代わりに衣食住を提供してもらっています。元は修行の旅でしたが、恩返しと門番という修行に適度な役職を頂いたので、現在は紅魔館に住んでいます。

「美鈴。夜ご飯の準備お願いね。私は事務作業に戻るから、終わったら教えてちょうだい」

「分かりましたー」

お嬢様は見た目は小さな女の子。その実、100を優に超えると言います。種族はかの有名な吸血鬼。西洋では一二を争う最強種族と本人の弁です。お嬢様が戦っているお姿を拝見した事は一度もありませんが。ただ、それでも私を助けてくれた恩は忘れる事ができません。もしかしたら、従者である私の方が強いかもしれないですが、だからといって謀反を考えたりはしていません。

しかし、私には気になる事??というか、気がかりな事が1つあります。それは、お嬢様の唯一の家族であり、おそらくは最も危険な能力を持つ吸血鬼、フランドールこと妹様の事です。何が気がかりかと言えば——

「めーりん。お腹空いたー。??げっ、お姉様居るじゃん??」

「あ、フランっ！ 私に会えない寂しさで、わざわざ会いに来てくれたのね！」



——お嬢様の妹様に対する接し方です。いつもは淑女らしく礼儀正しい人ですが、妹様の前だけ豹変し、ただのバカ姉??失敬。異常なほど妹を溺愛し過ぎる残念な姉と化します。唯一の家族であるから大切になさるのは分かります。ですが、それは家族愛というよりも恋愛のように感じてます。

「違うから。もう仕事に戻って会わないと思ったから来たの」

「そんなに冷たくしないでよお」

「ああ、はいはい。だからって引っ付くな」

正直、妹様のドライな対応もあつて最初は不仲だと思つてました。妹様は姉が嫌いで、適当に受け流しているだけだと思つてました。それ故に止めようともしましたが??。

「いつもしてる事なの??。それと最近、私の手料理食べてくれずに美鈴の料理ばかり食べてるけど、私の料理??嫌いになっちゃつたの??」

「いやお姉様の料理だし、美味しいから大好きだつて！ あ、別にお姉様が好きつて意味じゃ?!」

「ふふっ。もうっ、照れてるフランも可愛いつ！」

どうやら妹様の方も満更でもないご様子です。また本当はどちらもお互いの気を分かつてる節があるので、止めようとは思わなくなりました。恐らく、どちらも人前では恥ずかしいのでしよう。それであつても、相思相愛。羨ましいと思うくらいの仲睦まじさです。

「うー??。は、早く仕事して来い！ 後で相手してあげるから、今は引っ付くな！」

「あら、言つたわね？ 約束は絶対に守ってもらおうわよ？」

「あつ??もう、分かつた。はー、今日は調子悪いなー。??めーりん、ご飯お願い。お腹空いちやつた」

「分かりましたー。すぐに作つてきますね！」

仕えてまだ1年も経っていない私から見ても、姉妹という関係以上に仲が良い。禁断の恋だが、お二人が良ければ私も構わないと思つてる。私は助けられ、更には従者であるから、主であるお嬢様のご意向に反対する気などなれない。それに、お二人を見ていると、とても幸

せそうで和やかな気持ちになれるから――

――レミリア??紅魔館にて――

妹と妖精メイドだけで住み始めてから100年以上。ようやく、美鈴が家に来てくれた。前世から知ってる大好きなキャラ??いや、妖怪の1人だし、私ที่บ้านに居ない時にフランを守る唯一の住人だから、来てくれてとても嬉しい。未だに戦った事のない私だから、決闘で仲間にするのかと不安だったが、それもなく安心してている。

「??美鈴が来てくれて良かったね。お姉様の仕事の負担も減ったしね。いつも早く起きて私のご飯作って仕事して、ってとても大変だったでしょ? ??ありがとね、お姉ちゃん」

美鈴が料理を作りに行ってくれた後、フランがそんな事をふと呟いた。久しぶりにフランの本音を聞いた気がする。まさかそんな事を思ってた、それどころか褒めてくれるとは。さつき冷たくしてたのも、敢えてそうして今ここで喜ばせるためとかかな。もしそうなら、私は見事に術中に嵌ってる。

「??ええ、こちらこそありがと。フラン、本当に後で相手してくれるの? 何してもいい?」

「それ、妹の口から言わせるつもり? ま、たまにはいいんじゃないかな、とだけ言っておくよ。また欲求不満で襲われたら嫌だし、大変だしね」

「??ふふっ。そうね。なら、合意の上で、というわけで?」

「それでも変な事はしないですよ。したら自慢できないその胸が更に小さくなるから」

さらっと怖い事言ってるけど、流石に姉に対して破壊とかしない??

よね。ただの脅しだよ。脅しと分かっているのに、寒気がするのほどうしてだろう??。

「さ、早く仕事してきなよ。そろそろめーりんも戻ってくるよ。まだ行っていないと、心配されたり、迷惑かけちゃうよ?。」

「ええ、そうね。??行ってくるわ。それじゃあ、また後でね」

「うん。また後で」

フランに別れを告げ、私は1人、書斎に戻る。

今日は寝るのが楽しみだ。

そんな事を心の内に秘めながら――

## 10話「味」

——レミリア??紅魔館、地下室にて——

「さーてと。??次の朝まで誰も入ってこないよ。2人だけで、ゆっくりできるね?」

「??ええ、そうね」

風呂上がり。約束通りフランの部屋へすぐに向かうと、既にベッドの上で寝る準備を終えたフランが居た。2人だけの時に見せる、甘くも恐ろしい悪魔らしい悪い笑顔。最近になって見始めた顔だけど、私はこの顔が好きだ。別にフランの顔なら何でも好きなんだけど。

「フラン。隣、いいかしら?」

「そのために来たんでしょ? いいよ。遠慮なく来て」

甘い言葉に誘われて、フランの隣に入り込み、そのまま寝転がって毛布を被る。横を見ると、フランも同じようにして私を見ていた。が、特段何かあるわけでもなく、見つめるのも恥ずかしいので、反対を向いてすぐに目を背けた。

「??」

「??あの、お姉ちゃん? 敢えて聞かせてもらうけど、何もしないの?」

「な、何もって??逆に何かするの?」

私がそう聞くと、呆れた声でフランはため息をついた。何か間違えた事でも言っただろうか。そんな事を思っていると、背中に柔らかい感触を感じた。

「好きなんですよ? 私の事。なら、何かしたいとか思わないの?」

「例えばー??んー、なんだろ。と、とにかく、何か思わない?」

「??思わないわ。フランとこうして一緒に寝るだけで、幸せだから」

「は? それだけで幸せなの? 欲求不満になって襲いかかったくせに?」

「あ、そ、それは??」

それを言われると何も言えない。あの時の私は自制が効かないほどに欲求不満で、理性が本能に負けていた。元は人間。何百年も我慢

させられたら、爆発するのも当たり前だ。だから、反省はしても後悔はしてない。

「ね？ 言い訳できないでしょ？ 今度は私の欲求も解消してよ。?? 我慢し続けるの、辛いつて知ってるでしょ？ 私も他の人の前で仲良くないって見せるの大変なんだよ？ 知られたら恥ずかしいし、おかしいって思われちゃうから」

「??ちよつとくらい、見せてもいいと思うわよ。少し仲良いだけなら、普通の姉妹となら変わらないわよ。それに、誰にもおかしいなんて思わせないわ。貴女を絶対に守り通してあげるから、心配しないで」  
「ふふっ。お姉ちゃんのそういうところ、好きだよ」

後ろで静かに、そして嬉しそうに笑う声が聞こえた。声を聞いた瞬間、フランの純粹な笑う顔が見たくなつて振り返るも、時すでに遅し。既にいつも通りの悪魔らしい顔に戻っていた。

「でもね、やっぱり今はまだ無理かな。人前だと恥ずかしいの。ゆっくり慣れるつもりだから、それまで待つてくれる??」

「??ええ。私は貴女の姉よ。だから、昔みたいに??待つてあげるわ。いつまでもね」

「そっか??ありがとうね。お姉ちゃんが執拗いのは知ってるし、本当に待つてくれるんだろうな。??信じるよ。嘘偽りないって。だつて、知ってるからね」

その言葉に、思い出すのは昔の事。フランが幼いあの時の事。思えば、本当にこの娘は成長した。元気で、真つ直ぐとは言えなくても優しく、誰よりも可愛い妹に。

「そう言われると嬉しいわね。さて、寝ましようか。??抱き締めてもいいよ。」

「いいよ。つていうか、いつも色んな場所触つてくるくせに今更じやない?」

「あれはスキンシップよ。仲良くなるためのね」

「ふーん？ なら、私もしていいんだよね?」

有り得ない言葉が聞こえた。それを止めるよりも早く、下半身にいやらしい感触を感じた。両手を伸ばしてフランの腕を掴むも、やめる

気配は全くない。

「ひゃうっ?! ふ、フラン！ どこ触って?!」

「ん、お姉ちゃんの真似だけど？ いつも自分から攻めるくせに、攻められるのは弱いんだア」

「あう?! や、ひやめ！ 本当にやめっ?!」

更に激しくなる手の動きに比例するように、フランはいつになく悪い笑顔になっていく。止めたくても、止める事ができない。もう諦めてフランに身を委ねようとしたその時、激しきは突然失速する。

「ふふっ、ふふふ?! 嗜虐心煽るよね、お姉ちゃんつて。もーっとしてあげたい??けど、ふあ??はあああ??. そろそろ眠くなってきたし、今日はこれで終わりかな??」

「えっ?」

「あれ、もっとしてほしかった?」

「あ、いや、そんなんじゃ?!」

慌てた瞬間、フランの笑い声が聞こえてハッと我に返る。どうやら、またヘマをしたらしい。上手い具合に騙されたというか、誘導されたというか。ともかく、めちやくちや悔しい。

「冗談だから本気にしないでいいよー? もう、お姉ちゃんつてば単純だねー? そんなんじゃ、これからもずっと、2人っきりの時、私に勝てないよ?」

「ぐぬぬ??. もうっ、絶対に後で仕返しするから!」

「できればいいね? もちろん、そんな事された日には、その倍返して返すからね?」

「う、うー??っ」

どんどんフランの術中に嵌っている気がする。けど、やられた私の気が収まらない。怯えていてはどうにもならない。どうにかしてフランに仕返しを――

「あ、そうだ。お姉ちゃん。こっち見て」

「え? 何——んんっ!?!」

何をされるかと思えば、突然口付けされた。それどころか、舌を無理矢理ねじ込まれ絡められる。フランの肩を押して抵抗するも、背中

に回された手によって逆に近付いてしまう。フランの方が力が強いのもあって、私の抵抗も虚しく終わる。

「はっ?! 美味しい? 私はこれ、とつても美味しいと思うの。だからさ、あとちよつとだけ?」

「お、お願いつ。や、やめ?!んつ、んあ?!つ!」

深く、とても深く?フランが私を侵してくる。だがそれも、心地良い。私の中をフランがかき乱すこの感覚。このままフランにされるがまま、何もかも捧げるのも悪くない気がしてきた。どんどん意識が虚ろに、薄くなつてきた。最早、自分が誰かも分からなく――

「ふはあ?!あー、美味しかったあ?!」

「ほへ?!? あつ。??ふ、フラン。もつとお?!」

「あれ、意外と簡単に堕ちちやつた? ま、それでもダメだけど。夜更かしはお肌の天敵だよ? これ以上したら、止まらなくなっちゃう。それに?」

フランは話を続けながらも、毛布の中で私を優しく抱き締めてくれた。心地良い温もりで、眠気に襲われる。

「お姉ちゃんはこので充分でしょ? ほら、あつたかい。??ま、それでもキスしたいならそれでいいよ? その代わり、姉妹の一線を超える覚悟はしてよ? 元の生活に戻れなくても怒らないですよ? 私にだけ??尽くしてよ?」

「ふりゃ?!ごほんつ。わ、分かったわ。この際だから言っておくけど、私は恋愛的な意味でフランの事が好き。だから、元の生活にも、関係にも戻れなくていい。??フランも、それでいいよね?」

「うん、いいよ。お姉ちゃん??ずっと一緒に居ようね」  
優しく甘い誘い。それを受け、私はあまりの嬉しさに強くフランを抱き締めた。

「??強いつてば。そんなにしなくても、私はお姉ちゃんを受け入れてあげるよ? ほら、したい事しよ? 全部受け入れてあげる。??そろそろ本当に眠いから、できれば明日がいいけど」

「あら、奇遇ね。私も眠いの。??最後にキスだけいいかしら? 安心して眠れると思うから」

「いいよ。お姉ちゃんのリ由にして」

再び、妹の舌が私のそれと絡み合う。眠気も快楽へと変わり、脳が麻痺してきた。

味わい深く、病みつきになる危険な味。それを私は一生忘れる事ができないだろう。また、これから先、フランと元の関係には戻れないだろう。これからは姉妹としてじゃなく、もつと深い——恋人のような関係として生きたい。そして??。

その先を想像しながら、私は深い眠りについた——



## 11話「お風呂」

——レミリア??お風呂場にて——

身体の汚れを落とし、仕事の疲れを癒すためにお風呂へやって来た。最近妹と美鈴に安定した衣食住を提供するために働き詰めだったから、今日はより一層疲れていた。

「はーあ??いい湯加減ねえ??」

今はもう身体を洗い終え、湯船に浸かっている。今この時だけは日頃の鬱憤やストレスを忘れる事ができ、静かな時間を過ごす事ができる。もし、この場にフランが居ればその癒しはより一層増す事になるだろう。だけど、いくら昔より仲良くなったとはいえ、一緒にお風呂に入るのは私が恥ずかしい。

だって、一緒にお風呂に入るという事は裸を見せ合う事になるわけだし、それで欲求を抑制しろ、というのも無理な話だ。絶対触りたくなくなるか、恥ずかしさのあまり動けなくなるかの二択。まあ、今の私に妹を襲うような度胸は無いから、絶対に固まって動けなくなるか。「はあ??いつフランとイチャイチャできるんだろ??。もう少し積極的になった方がいいのかしら??。でも、そんな事すれば、拗れる可能性も??」

「お姉ちゃん、お邪魔するよ」

「ええ。勝手にしなさい。??って、えっ?」

「ん? どうしたの?」

私の目の前に、何食わぬ顔で頭を傾げるフランが居る。それも、布1枚纏わない危機感の無い姿で。

「な、なっ!? ど、どうしたの、って! 貴女、せめて入るなら布の1枚くらい羽織りなさいよ! その??色々と見えちゃうでしょっ!」

「へ? ??あー、なるほどね。ふっ、え? お姉ちゃんってば、妹の身体を見て欲情しちゃってるの? やっらしいー」

妹は口元を歪めながら、可愛い顔して煽ってくる。

「なっ!?。そ、そんなわけ??なくもないけど?」

「いやそこは否定しようよ。なんで頬赤らめてんのさ」

「あつ。い、いえ！ そんなつもりじゃ?!」

突っ込まれるまで、素で恥ずかしい言葉を使つてたと気付かなかつた。慌てて否定しようにも、フランは呆れたと言わんばかりに首を横に振る。

「はー、全く??。何恥ずかしがつてるの？ もう元に戻れない生活をしていい、つて言つたよね？ なら、裸を見るくらいどうつて事ないんじゃない?」

「それはそうだけど??」

「??お姉ちゃんつてば、本当に奥手だよね。??つまんないの」

それからは気まずい空気が流れ、私は疎かフランでさえ無言になつてしまった。フランはそのまま何も言わずに髪や身体を洗い始めた。フランが洗つてる最中、私は何もできずに、ただただ妹の後ろ姿を眺めるしかできなかった。

「??もうっ。??お姉ちゃん。隣、失礼するよ」

「??え？ あ、ええ??」

そうして洗い終えたフランは怒つた顔で私の隣に浸かる。それにしても、どうしてだろう。頭がボンヤリする。フランを見たいのに、注意が散漫して、じつと見る事ができない。

「??お姉ちゃんつてき、私の事好きだよね?」

「??うん、大好き??」

「それは真っ直ぐに言えるんだ。ふーん??」

注意が散漫しても分かる。フランのご機嫌は斜めらしい。私が優柔不断なせいかな。それとも、恥ずかしがつて奥手なせいとか。どれにしても、私に非があるのだろう。それだけは、フランの口調から伝わってくる。

「そう言えばさ、お姉ちゃんは元の関係に戻れなくていいとも言つたけど、具体的に私とどんな関係になりたいと思つてるの？ 姉妹以上だから、親友？ それとも、恋人とか??」

「そうねえ??私は、フランとならどこまでも??ずーっと一緒に、居たいわ??」

「答えになつてないんだけど？ あのさ??あれ？ あの、お姉ちゃん

？」

フランの私を呼ぶ声が聞こえる。朧けな視界の中、何故かしつかりとフランの顔だけが見える。

「お姉ちゃん？　なんだかいつも以上に顔が赤いよ？　もしかして、逆上せ??熱っ!!　え!?!」

フランが私に触れてくれた。でも、なんで？　凄く悲しそうな、辛そうな顔に見える。

「もしや、風邪??。お、お姉ちゃん、本当に大丈夫!?!」

「何が??　フラン??」

「マジかこの姉??。最近頑張ってるなー、とは思ってたけど、頑張り過ぎでしょ絶対っ！　嬉しいけど、ちよつとは休んで！」

「フラン、なんで??怒ってるの??？」

「もうっ！　本当にこの姉は?!?!」

フランの怒ってる顔を見ると心が痛む。でも、フランに私の声は届いてないのか、無理矢理私を湯船から引き上げ、私をその小さな背中に背負う。

「すぐに部屋に連れて行ってあげるから、ちよつとだけ耐えて！　吸血鬼って熱とか風邪に強いんじゃないの？　あれって嘘なの!?!」

何に対して怒ってるか分からない。もう、妹の声すら虚ろになつてきた。

「お姉ちゃん??後もう少しだけ、頑張って！」

でも、フランの肌の温もりだけは、自分の肌を通して実感できる。柔らかくて、温かい??この弾力と触感だけは、絶対にあるものとして実感する事ができる。どれだけ声が聞こえなくとも、見えなくとも、私を導いてくれる。

「フラン??ありがと??」

もう自分の声すら聞こえなくなり、私の意識はそこで途絶えた――

## 12話「風邪」

——フラン??レミリアの部屋にて——

お風呂で倒れたお姉ちゃんを部屋に連れてきた後、すぐさま美鈴を呼んだ。私1人じゃどうすればいいか分からないし、妖精メイドじゃ頼りない。こんな時に頼れる美鈴が居てくれて良かった。

「美鈴??お姉様、どう??」

ベッドで眠るお姉ちゃんを見ていた美鈴に、心配になって語りかける。

「??一先ずは大丈夫です。しかし、珍しいですね。吸血鬼が風邪を引くなんて。いえ、ただの風邪でもなさそうですが??。かなりの高熱です。人間なら間違いなく死んでいるレベルの」

「えっ!?! お、お姉ちゃ??お姉様、本当に大丈夫なの!?!」

「はい、大丈夫ですよ。お嬢様は吸血鬼ですから。このくらいの熱で死ぬ事はありません。ですが、1つだけ問題があります」

どうしてわざわざ不安な事を言うんだろう??。ただでさえ、お姉ちゃんが風邪を引いたってだけでも、とても不安なのに。というか、ただお姉ちゃんが倒れただけでこんなにも不安になるんだ、私って??やっぱり、好きなんだなあ。

「この館には薬がありません。どうやらお嬢様、誰も病気にならないだろうと高を括っていたようですね」

まさかの自業自得。確かに今の今まで私もお姉ちゃんも風邪を引いた事がなかったから、気を抜いてたのは仕方ない。だけど、だからと言って、何も用意しないのはどうなのか。

「め、美鈴。人間の薬ってお姉様にも効くかな??」

「恐らくは??。ですが、効き目は薄いかと??」

「そ、それでも! ??何もしないよりはマシだよね? お姉様、今も辛そうだし??」

辛そうに顔を赤く染め、息苦しそうに咳をする。今までずっと待ち望んでいた無防備な状態だけど、とても襲う気にはなれない。これ以上、体調を崩せば、一生お姉ちゃんと会えなくなる気がするから。

「??妹様はお優しいですね。仲睦まじくて嬉しい限りです。ええ、何もしないよりはマシでしょう。効き目が薄いと言つても、効果が全くないわけではないと思いますし。それに、身体の構造自体は人間と差ほど変わらないでしょう。もしかして??行くつもりですか?」

「うん。止めないでね、美鈴。ま、止めても行くけど」

「ええ、もちろん??止めないですよ。確か、お嬢様の書齋にお金があるはずです。ついこの間、買い物へ行ったそうなので、あまり高い額ではないらしいですが??」

さらつとお姉ちゃんの貯金が無処にあるか把握してる美鈴が怖い。だけど、それよりも、前々から思ってた事だけど、お姉ちゃんって何時、何処でお金を調達してるんだろう。お姉ちゃんと一緒に買い物に行つた時は欲しい物何でも買つてくれるけど、いつもしてる事務作業だけでそんなに儲かるのかな。よく分からない。

「じゃ、行ってくる。美鈴! お姉様をお願いね!」

「はい、お任せください!」

この場を美鈴に任せ、私はお姉ちゃんの書齋へ向かう。そして、お姉ちゃんのお金を見つけた私は、人間の街へと向かった。

人間の街はいつも通り、大通りは賑わってるが、裏の通りや街の中心から離れるにつれて、不気味なほどに静まり返っている。まるで私の不安や未来をこの街全体で表しているようだけど、今は気にしてられない。何よりも最優先するのはお姉ちゃんの病気に効く薬を見つける事。私の気分次第で暗く見える景色なんて、気にする暇も意味もない。

とにかく薬を買って、急いでお姉ちゃんの元へと戻らないと。

「すいません??。当店では現在、持ち合わせがなく??」  
「??は?。」

そう思つて、今の時間に唯一開いてた薬屋に来たけど、予想外の言葉が返つてきた。思わず心の声が出たせいかな、店員さんが少しビツクリしてた。

「あのさ、私のお姉様が！ 今、この時間も！ 苦しんでるんだけど!？」

「そ、そうは言われましても??。流行病の影響で、薬の需要が高まつてしまつて??」

「需要高まつただけで普通全部なくなる？ 有り得ないんだけど？」

「あ、あの??貴族様の間で特に流行つてるらしくて??」

「あー、そゆこと??ちつ」

やはり、人間の貴族は虫が好かない。どうせ自分の事だけを考えて薬を買い占めたのかな。あるいは、私と同じように困つてる人に対してマウントを取るためか。価格も自由に設定できるし、恩も売れるし、至れり尽くせりだし。

あ、ちなみに私は全部お姉ちゃんのためにやってるし、人間の貴族とは違うという事で。一応、私達も吸血鬼の間だとそれなりの貴族ではあるらしいけど。

「??その貴族、何処に居るとか知ってる？ それか、ここ以外に開いてる店教えて」

「い、言い難いのですが、誰が買い占めたのかは存じ上げなくて??。それに、恐らくですがこの辺りは全て貴族様が買い占めているかと??」

「はー、マジか??。そっか。ありがと。じゃ、またね」

諦念を覚え、半ば途方に暮れながら、私はその薬屋を後にする。そして――

「あつ??」

「へ？ うおつと。だ、大丈夫？」

――店を出たと同時に、私はある少女とぶつかる。

「?! た、助けて！ 追われているの！」

「??へ？」

その少女??紫髪の少女との出会いが、私やお姉ちゃんの運命を変え  
る事になる——

### 13話 「魔女」

——フラン??人間の街にて——

「?! た、助けて！ 追われてるの！」

「??へ？」

「お、お願い！ 貴女も私と同じなんですよ!？」

店を出たところでぶつかった紫色の長髪を持つ少女が、慌ただしく私を急かしてくる。何が同じなのか私にはさっぱりだけど、何かに追われてて、私が普通じゃないという事に気付ける不思議な少女というのは分かった。

こういう時って、もれなく追ってる側も追われている側もただの人間じゃないんだよね。面倒事には関わらない方がいいし、そもそも今はお姉ちゃんの事が先決だから、構ってる暇なんてないのに。

「も、もしかして、見えてな——っ！」

少女が何かに気付いて、来た道を振り返る。と、少女の背後から10人ほどの鎧を身に纏った人間が現れる。全員剣や槍などの武器を持ち、更には金色の縁をあしらった奇妙な片眼鏡モノクルをかけてる。この人達の主の趣味じゃない限り、ただの装飾やオシャレではなさそうだ。「おいおいおい??。手間かけさせるんじゃないよ。こちらら君みたいな人間の紛い物を、何百何千と追わなきゃいけないんだ。1人に割いてる時間はないよお?。」

リーダーらしき中年のおっさんが1歩前に出て、少女に剣を向ける。大の大人が寄って集って1人の少女を囲むなんて、卑怯で卑屈な奴らだ。ま、私なら1人でも全員壊せるんだけど。

「っ?! 私は何い物でもなんでもないわ！ わ、私は??れっきとした人間よ！」

「はいはいはい??。君らはみんなそう言うが、教会の目は誤魔化せんよ。??おっと。どうやら、そこのお嬢ちゃんも人間ではないらしいねえ??。」

あーら、気付かれたか。ん、あー、なるほど。あのモノクル、そういう道具か。だから、私の正体が分かったのかな。という事は、この



少女も実は人間じゃないのかな。それで「同じ」なんて言葉を使ったんだね。

「その眼鏡つてさ、真実の姿が見えるとか、そんな道具だったりする？」

「それはどういう意味だい？　もしかや、ただの魔女ではないのかな？」

「あ、違うんだ。なら、なんだろう？」

「??私達みたいに——貴女は違うみたいだけど——相手の魔力を見る事ができるモノクルらしいわ」

私の問いに、代わりに少女が答えてくれた。つていうか、騒ぎになったせいでこの街にはもう来れなさそうだな。野次馬もいっぱい集まってきたし、逃げれても私の顔を覚えてる人とか現れそうだし。お姉ちゃんに似たお陰で私も可愛いから、すぐに覚えられそうだしね。

「珍しいな、君のような気楽な魔女は。——今から死ぬ者に、珍しいも何もないがな」

その言葉を合図に、私達を囲うように人間達が広がる。みんなこつちに武器を、怖い眼差しを向けてる。とても殺気立って、会話して解決するような状況じゃない。

「っ!?　し、仕方ないわ！　魔法を使えるなら援護して！　2人で——」

「あー、ごめん。1ついいかな？　魔女ならさ、回復の魔法とか使える？　風邪に効くような」

「か、風邪に効く薬なら作れるけど、今の状況でそんな??？」

「よし。なら、助けてあげる。その代わりに、私のお姉ちゃんの風邪を治してね。約束だから。私はフランドール・スカーレット。フランでいいよ。貴女は？」

あれ、どうしてだろう。私の名前を聞いてその少女は小さく笑った。そして、納得したような表情で私を見つめ、口を開く。

「??もしかして、悪魔か何かかしら？　それも世間知らずで箱入り娘の。それで、名前を聞くという事は契約をしようとしているのよね？　でも、今はそれが心強いわ。私はパチュリー。パチュリー・ノーレツ

ジよ」

ノーレッジ??確か意味は『知識』だったかな。西の島国でよく使われる苗字だったはず。という事は、その国出身かな。遙々遠くまで大変だっただろうに。本当に、大変だったんだらうね。

「ふふつ。それじゃ、パチュリー。しゃがんでね」

「え、ええ??!」

「なっ!? ふ、伏せ——」

パチュリーが伏せたと同時に、虚空に巨大な燃え盛る炎の剣——レーヴァテインを召喚し、思い切つて横一文字に薙ぎ払う。それは人も建物も関係なく真つ二つに焼け切り、それを目撃した野次馬達によつて辺りは騒然となる。生憎と人間の被害なんて気にしてなかったけど、運が良いというのかな。人間の兵士しか切れてないようだ。その兵士のリーダーを除いて、みただけだ。

「くっ?! スカーレット??まさかとは思つたが、あの吸血鬼館の??あの悪魔の妹か??!」

「お姉ちゃんを知ってるんだ。有名人なんだね、私のお姉ちゃんつて」  
お姉ちゃんが有名人というだけで、なんだかとても誇らしいし、とっても嬉しい。やっぱり、私のお姉ちゃんは凄いんだ。強いかどうかは知らないけど、優しいから当たり前か。

「ふつ、魔女狩りに、大物に出会えるとは、な??。俺の命運もここまでか。が、王の命令! それに従わずして、手柄無くて帰るつもりはない! 例え負けようが、魔女の1人くら——あ」

言葉を言い終える前に、その兵士は内側から破裂し、肉片を撒き散らし、原型を留めずに死に絶える。もちろん、私の能力で『目』を手のひらに移動させ、握っただけなんだから。

「静かになつたね。??じゃ、パチュリー。私と一緒にいこうか。あ、もしお姉ちゃんの病を治せなかったら、貴女もこうなるからね?」

「怖い脅しね。??それと、重いわね。愛というか、絆というか??!」

「うーん、そうかな?」

重い愛つてどういう事なんだろう。普通じゃない、つて意味なのか。私も普通じゃないのは重々承知してるし、むしろ普通じゃなくて

いいんだけど。だって、普通じゃなければ、お姉ちゃんを愛せるんだから。

「ま、いいや。お姉ちゃんは今も尚苦しんでるの。だからね、すぐに連れて行ってあげる。病を治した後は??ま、それはその時に考えるとして、今は急ごうか。ね?」

「??ええ、そうね。私もこんな場所にずっと居たくはないわ」

騒々しい人間達をパチュリーは怪訝な目で見渡す。その目に宿るものは嫌悪というよりも恐怖に近いように見える。何か嫌な事でもされたのかな。もしそうなら、原因となるものくらい??消しちゃえばいいのに。

「??ま、いつか。さ、パチュリー。急いで飛ぶから背中に掴まって。振り落とされないですよ?」

「それはいいけど、咄嗟の時に飛べるか分からないから、万が一落ちそうになったら助けてよ」

「はいはい。わがままなお姫様だなー」

なんて、グダグダ言っても仕方ないか。そう思って、パチュリーを背に乗せる。そして、暗い空へ、紅魔館までへの帰路についた――

## 14話「残留」

——フラン??紅魔館にて——

「これで一先ずは安心。後はゆっくり、安静にしていれば徐々に良くなるわ」

「??うん。ありがとうね、パチュリー」

パチュリーを家に連れ帰った後、彼女はすぐに紅魔館周辺や館の在庫から薬草を集めてきた。それらを使って薬を作り出し、それをお姉ちゃんに飲ませてくれた。飲んですぐに目に見える形でみるみる回復していき、今では熱も引いて安らかに眠っている。

こんなに無防備な睡眠をとるお姉ちゃんはとても珍しいし、無事治りそうだから、とても良かった。もしこのまま治らないなんて事があれば、私はどうなっていたのか。想像するのは容易い。

「それで? 私はどうするべきかしら? 万が一薬が効かなかった時は私を殺すつもりなんでしょう? なら、逃がしてくれないわよね? 私としてもここ以外に居場所があるとは思えないから、できるならここに居候したいのだけど」

私のイメージが悪過ぎないか。パチュリーの前で人間を殺したせいだろうか。あれは正当防衛だから仕方ないのに。そもそも人間なんて食料でしかないんだし、わざわざ気にする事もないと思うんだけど。

それはそうと、居候か。役に立たないメイドよりかは魔法が使える分、幾分か役に立つだろう。でも、私は主じゃないし、決められないから答えようがないね。

「殺しはしないよ。勿体ない。むしろ生かして次の薬を作らせる。ちゃんとお姉様に効く薬を、ね。ま、今ではもうその心配はなさそうだけど」

「ふーん??意外と良心的ね。で、居候の方はいいのかしら?」

「それはお姉様に聞いて。私に決める権利なんて無いから。それと、上に図書館があるからそこで待ってて。魔女なら本好きでしょ」

「あら、それはどうしてかしら?」

質問されても答えようがない。というか、答えたくない。姉が大好きだから、2人つきりにさせてくれとか、恥ずかしくて絶対に言えない。

「??ふん。さ、どうしてだろうね」

「教えてはくれないのね。??でも、何となく分かる気がするわ。貴女、見た目以上に分かりやすいから」

「ほえ?」

一体何を言ってるんだろう。そう思っていると、パチュリーはそそくさと扉へと向かった。ようやく話を聞いてくれたのかと思っただけど、どうやらそうではないらしい。含みのある笑顔を見せた。

「お姉ちゃんの前だと恥ずかしがり屋なのね」

「ん? ??あつ!? ちよ、ちよつと貴女??!」

「ふふっ。じゃあ、また後でね」

そして、その気味悪い笑顔のまま、部屋を立ち去った。

「??あ、あの魔女っ! そ、そう言えばあの時、素の呼び方だったっ??! うわっ、恥ずっ! 私恥ずかしっ!? き、記憶とか壊せないかなっ?!」

「??フラン?」

「ん? な、に??あ、お姉ちゃんっ!」

偶然にも丁度いいタイミングでお姉ちゃんが目覚めてくれた。もう大丈夫そうだから、嬉しくて思わず声を上げてしまいそうだった。いや、実際に声は上げちゃったんだけど。

「もう大丈夫なの!? あ、ごめんね、うるさかった??」

「フラン??1人に、しないから??」

「え、あ、ちよっ、何やって??!」

寝惚けてるのか虚ろな目で私の腕を掴み、力づくでベッドへと引き込まれる。咄嗟の事で反応も抵抗もできず、気付いたらお姉ちゃんに抱き締められていた。熱は下がったと言っても、その体はいつもより熱を持つてる。そのせいか、とても温かく、眠気を誘われる。

「大丈夫??私が??守る??」

「や、やっぱり寝惚けてる?」

「守るから、安心して??ね?」

どうして急にそんな事を言ってくるのか。どうして守るなんて言葉が出てくるのか。分からない。突拍子もない言葉が理解不能で、姉に何が起きてるのか分からない。恐らくは寝惚けてるだけだけど、それでは説明が付かないほど正気だとは思えない。

「お姉ちゃん? どうしたの???」

「ごめんね??? あの時???すぐに行動できなくて???」

「??あつ、そういう事???」

お姉ちゃんのその言葉でようやく理解できた。お姉ちゃんが今もずっと悔やんでた事、今も尚、許しを乞うてた事を。

「もういいんだよ? あの時に誤解は解けたし、お姉ちゃんの気持ちも今は理解できたから。だからね、もう謝らないで?」

「フラン??もう、悲しませないから???」

お姉ちゃんの腕の力が強まり、更に引き寄せられて抱き締められる。どうやら、私の声は届いてないらしい。夢現に昔の事でも思い出して、幻覚でも見てるのかな。それでも、その言葉が聞けてとても嬉しかった。幸せだった。

「うん??ありがとう、お姉ちゃん」

お礼と言わんばかりに抱き締め返す。が、それと同時にお姉ちゃんの力が弱まってしまう。

「フラン???」

「あれ???」

今度は言葉が届いたのか、いつの間にか、幸せそうな笑顔でお姉ちゃんは再び安らかに寝ていた。それを見て、釣られて私も嬉しくなる。言葉がしっかり伝わったのかは分からないが、改めて「言えて良かった」と思える。

「??おやすみ、お姉ちゃん」

お姉ちゃんに自分の思いを伝えたと確信した私は、その温もりに身を任せ、誘われるまま瞼を閉じた――

## 15話 「知識人」

——レミリア??紅魔館、大図書館にて——

紅魔館の中でも特に広大な部屋、図書館。多種多様で大量の書物が置かれたその部屋には、幾つか小さな部屋が繋がってる。そこにも本棚が並んでて、埃っぽく、とてもじゃないけど暮らせる部屋じゃない。が、最近、そこに暮らし始めた人が居る。

「貴女がパチュリーね。私がこの館の主であるレミリア・スカーレットよ。よろしくね」

「??ええ、よろしく」

その人の名前はパチュリー・ノーレッジ。俗に言う原作キャラの1人で、前世から知ってる人だ。前世の記憶通りなら私ことレミリアと親友のはずんだけど??読書中に横から話しかけたせいかな、かなり素っ気ない。初めは誰だって顔見知りから始まるとは言え、ここまで素っ気ないと本当に親友になれるのか心配だ。

もしかしたら、私が転生した影響を受けて親友じゃなくなる、なんて運命もあるかもしれない。だが、それは嫌だ。せつかくなら原作みたいに分かり合ってる友達になりたい。そして、あわよくば親友に??

「??」

「??あの、何か話さない?」

「私から話す事なんてないわよ」

とか思ってた数分前の私が最早懐かしい。素っ気ないというか、よそよそしいというか。いや、それ以上にパチュリーとの距離が遠い気がする。

「??あ、そうだ。フランから聞いたわ。私の病を治してくれたのってパチュリーなのよね? ありがとうね、私を治してくれて」

「お礼なんて要らないわよ。その代わりにここに住ませてくれればそれでいいから。まあ、貴女の妹に許可は貰ってるのだけど、一応念の為に貴女からも許可が欲しいの。じゃないと、都合が悪くなれば追い出されそうだし」

ようやくまともにも話してくれたかと思えば、事務的な確認。まだまだ私を信頼してくれていない、という事か。なら、何とかして仲良くなるしかない。美鈴もすぐに仲良くなれたし、信頼関係を築けた。パチュリーともきつと仲良くなれるはずだ。

「ええ、もちろんいいわよ。そう言えば、貴女はどうして追われていたのかしら？ フランからは詳細を聞いていないから、知りたいわね」  
「???'」

あれ、まずい事言っちゃった？

そう思わせるしばらくの沈黙。しかし、何か訂正するよりも先にパチュリーが口を開いた。

「魔女だからよ。知らない？ 最近、巷で流行りの魔女狩りの事を。魔法が使える者は皆魔女として断罪される。私は安全な場所が欲しいの。だから、貴女を助けて、安全な場所を提供してもらった。だから、私に関わらなくていいわよ。私はひっそりと暮らせれば——」

「??え？」

予想外の答えが返ってきたからか、パチュリーは目を丸くしてる。疑問をそのまま口に出して答えを待っていた。

「ここに暮らす時点で私の家族も同然。私はこの館の主として貴女を守る義務がある。貴女と関わらない、なんて要望は聞けないわね。何度も言うけど家族だもの。関わらないなんて到底無理な話じゃなくて？」

「??妹もそうだったけど、変な吸血鬼ね。だけど妹と違って、貴女は悪魔のように強引なのに、根は悪魔じゃないみたいに寛容。姉妹でも正反対なのね」

フランも根は天使みたいだと思うけど、何か勘違いしてるのだろうか。フランがパチュリーと出会った経緯を詳しく話さないと何か関係があるのだろうか。もし何かあったとしても、私はフランを信じてるけど。そもそもフランは元から悪魔だし、多少のエグい行動には目を瞑るつもりだけど。可愛いし。

「??思ってたよりも楽しい場所みたいだわ。改めて、パチュリー！ノー



レヅジよ。パチュリーでもノーレヅジでも、何でも好きに呼んでいいわ」

「?!」

これは好機だ。もしこれを逃せば、奥手である私は一生チャンスを失ってしまう。それはフランの時から分かってる事だから、これを逃がしたくはない。そうしてしばらく考えた後、勇気を出して口を開く。

「なら、パチエでいいかしら？ 仲良くなりたいしね。私も??そうねえ。レミイ、と呼んで構わないから」

「呼び方に執着なんてないからいいわよ、レミイ」

「??ふふっ。それじゃあ、これからよろしくね、パチエ」

「ええ、よろしく。レミイ」

この日、私は初めて友達ができた。それがあまりにも嬉しく、それから私は図書館に入り浸るようになる――

## 16話「嫉妬」

——フラン??紅魔館、図書館にて——

新たな同居人  
パチュリーが来てから数年の年月が流れた。彼女は出会った時とあまり変わりなく、相変わらず図書館で暮らしている。紅魔館ではなく、図書館で。同じ館で暮らしてはいるものの、図書館以外で見かける事はほとんどない。パチュリー曰く、魔導書が豊富にある図書館は、魔女である彼女からしてみれば宝物庫のような場所なのだとか。だからこそ、そこから動きたくない、という思考らしい。

それはいいと思う。私としては全く被害はないし、部屋から出ないのは個人の自由だから私が口出しするような問題じゃない。だけど、1つだけ、パチュリーに対してとても気に食わない事がある。

「パチエー」

「ごこよ。レミイ、何か用?」

「ふふん、何か用が無ければ来てはいけないのかしら?」

最近、お姉ちゃんと仲良くし過ぎてる事だ。私が隣で本を読んでい  
るのにお構い無しに話してる。それも愛称で呼びあって、とても親し  
そうに接してる。ま、私も? 「フラン」って愛称で呼ばれてはいるけ  
ど? そ、それにレミアアって名前なのに私はお姉様やお姉ちゃんつ  
て愛称で??それは違うか。なんだか言ってて虚しくなってくるし、こ  
れ以上愛称云々で何か考えるのはやめよう。

でも、それでも。私もいつか「レミアア」とか「レミイ」とか、恋  
人みたいな呼び方してみたいな。いつまでも姉妹じゃ、結婚なんて夢  
のまた夢だろうし。そもそもずっとお姉ちゃんにマウント取られた  
くないし。

「??そんな事はないけど、毎日何も用がないのに来られちゃ、流石に迷  
惑よ?」

「そんな事言つて、嬉しいんでしよう?」

「嬉しくないわよ。貴女が付いてくると色々??はあ」

お姉ちゃんとはともかくパチュリーは私の気持ちに気付いてるらし  
く、チラリとこちらに視線を移す。この様子からして、仲が良い原因

はお姉ちゃんの方にありそうだ。それ自体は嬉しい事だけど、私としては余計に気に食わない。私という妹が、恋人がいるのに、他の女性と親しくするなんて、本当に??。

「パチエ、どうしたの?」

「どうしたもこうしたもないわよ。貴女、フランの事わ——」  
「しっ。??もう少しだから」

私に聞かれたくないからなのか、とても小さな声で話し始めた。お姉ちゃんよりも私の方が耳がいいから、聞こえてるとも知らずに。

「私も目の前で無視して話すの、とても辛いだよ? 一歩間違えれば嫌われる行為だし、フランを信じてないとできない事だし??。でも、これを耐えればきつと??もう一つ上の段階に??うふふふ」

「はあ??貴女の作戦に付き合わされる私の身にもなつてよ??。というか、目の前で話しても??」

「大丈夫大丈夫。あの娘は本に夢中だしね。どうせ聞いてないわよ」

聞いてるといふか、聞こえてるんだけど、これはフリか何かかな。あまりにも雑過ぎて、乗る気にもならないけど。つてか、今の話??もしかして、そういう事かな。もしもそうなら、お姉ちゃんは意地悪だ。なら私も、意地悪しよう。

「??そ。それならいいけど」

「——お姉様!」

「ひゃっ!? え、ふ、フラン? な、何かしら?」

「??変で大きな声出さないでよ、それも耳元で??」

突然の事でびつくりしたのか、とても面白い驚き方をしていて。それを近くで聞いていたパチュリーはうんざりした様子で、呆れている。

「お姉様、後で私の部屋に来て。何の用かは??もちろん分かってるよね?」

「えっ!? え、ええ??!」

「じゃ、先に部屋に戻ってるからねー」

「ええ、すぐ向かうから待っててね!」

私が気付いたと分かっているらしく、とても嬉しそうな顔。でも、お

姉ちゃんの思うようには絶対しないし、させない。お姉ちゃんが今ままで私にしていたみたいに、思いつきり焦らして、私の思うように行動させよう。そして、私もお姉ちゃんも、満足できるような結果に??.  
そう決意して、一足先に部屋へ戻った――

## 17話「発散」

——フラン??紅魔館、地下室にて——

「フーラーンっ！　ちゃんと来てあげたわよ？　どうしたのかしらっ？」

セリフとは裏腹に嬉々とした声。私が知っていると理解してるからこそ、敢えて自分は知らないフリをして楽しんでいるのかな。——自分だけが得しようなんて、絶対にそんな事はさせない。絶対にお姉ちゃんの思い通りにはさせない。これからのためにも、私も得するためにも。

「ううん、何も無いよっ！」

だから、私も敢えて知らないフリをする。お姉ちゃんが私にしたみたいに。そして、私の思うままに行動させ、今度は私の上に立つ。今は姉妹でも、今後は上下関係が重大になってくると思うから。

恋人という関係として。

「え???　な、何も無いの？　なら、どうして呼んだのかしら？」

「何か用がなければ呼んじゃダメなの？　姉妹なのに」

「うっ??確かにそうね。その通り、だけど??」

お姉様がさつき自分で言ったセリフなのに、なんとも不服そうな顔で頷く。いつも通り、子供みたいに我儘な姉だ。それが可愛いところでもあるんだけど。

「そう言えば、お姉ちゃん。最近いつつもパチュリーと一緒に居るみたいだね？　それも私の事無視して。ねー、どうしてー？」

「えっ、あの??そ、それは??友達だから??そう！　親友だからよ？　悪いかしら？」

この姉、話す度に墓穴を掘ってるような気がする。咄嗟の思い付きで話してるみたいだから、仕方ないっちゃ仕方ないけどさ。

「んー、それ自体悪い事じゃないけど、私の事無視するのって、悪い事じゃない？　もしかして、悪くないとでも思ってるわけ？　妹なのに。好きって言った相手なの??」

「そ、それは、その??!」

わざとしおらしい反応を見せて痛いところをつくど、急に慌てだした。どうやら、本当に言い返せないらしい。ちよつぱり嫌味っぽいけど、そこはご愛嬌という事で許してくれてるのかな。それとも、妹だから優しくしよう、なんて理由で許してくれてるのかな。

もしそうなら、なんか嫌だな。まだ子供って思われてる事になるし。

「ふーん??言えないんだ。残念。やっぱり私なんかよりもパチユリーの事を??」

「それは違つ——」

「いいよいいよ。姉妹だもんね。普通、恋愛対象なわけないしね。小さい頃から一緒に育った相手と恋愛関係になりにくい、なんて事もあるらしいし。私がおかし——」

「だから、違うわよ!」

そのセリフを言うよりも早く、お姉ちゃんは後ろから抱き締められた。いつも通り、いつまでも味わいたいような心地よい温かさ。

「??違うから。私は、フランの事好きだから。本当に、愛してるから??」

失敗した。感情が高揚して、あまりにも自虐的になり過ぎた。それでお姉ちゃんを困らせるなんて、悪い事しちゃったな。多分、お姉ちゃん、本当に心配してくれてるんだろうし。

「本当に? 絶対に、離さない?」

「??うん、離さないわ」

耳元で囁かれる小さな声。そんな小さな声でも、私が信用するには充分過ぎるほどの力を持っていた。長年一緒に居たからこそ分かる。この言葉が本当に、嘘偽りないという事が。

「そっか??。信じるよ?」

「信じていいわよ。何があっても、私は貴女を離さない。姉だもの??ん?」

「え? 何かおかしな事言った?」

お姉ちゃんったら、未だに姉と妹の関係程度にしか見てないらしい。それは嫌だ。姉と妹なんて、いつまで経っても進展しないのが目

に見えてる。私はもつと、これ以上もつと進展して、いつかきつと——恋人になりたい。

「お姉ちゃん。??ううん、レミリア」

「きゅ、急にどうしたの？ 呼び捨てなんて??」

「口挟まないで。??私ね、レミリアとは姉妹じゃなくて恋人みたいな関係でいたい。これから先、ずっと??。それで、いつかはおね??レミリアと結婚とか、その他言えない事も色々、と??うん??」

自分から言っただけはいいものの、段々恥ずかしくなってきた。顔が熱くなってるのも分かるし、多分、赤くもなってる。今後ろから抱きつかれてるから見られはしないだろうけど、もし見られたら、なんて考える——

「??フラン、耳赤いわよ。恥ずかしいの？ そんな事言いながら。ふっ、可愛いわねえ」

「ぼっ?! ち、違うから！ これは?!」

「もうっ、そんな言い訳しなくていいわよ。——言わなくても分かっているから、ね?」

全てを見透してるかのような言葉。他の誰かなら苛立たしい言葉でも、お姉ちゃんに言われると、とっても嬉しい言葉だ。

「??レミリアの意地悪」

「意地悪でもいいわよ。フラン相手ならね。??そうだわ。ねえ、フラン。もう一歩だけ、進んでみない?」

「ほえ? 何言って——あっ」

突然の事で理解が追いつかなかった。気付けば私はベッドに押し倒されていて、上にはお姉ちゃんが乗っていた。珍しく、悪戯好きな子供のような悪い笑みを浮かべて。

「姉妹じゃなくて、恋人みたいな関係、でしょう? いいわよ。その代わり??覚悟は、してるわよね?」

「えっ??」

凄く冒瀆的に聞こえる禁忌の言葉。その言葉を理解した途端、吸い込まれるように、私はしっかりと、深く頷いた。

「うん、もちろん。優しくしてよ、レミリア??」

「ええ、しっかりリードしてあげるから、安心なさい」  
そして、私はレミリアと、手始めに軽い口付けを交わした――



## 番外編

### 番外編1 「狂依存」

——レミリア??紅魔館にて——

今、私はとても困ってる。それはもちろん、フランが可愛過ぎる事  
でだ。

独り占めしたい。誰にも渡したくない。ただ一途に、私の物にした  
い。その身体も、血肉も、行動も思考も??私だけの物にして、私とい  
う存在で埋め尽くしたい。自分でも狂ったと思える感情から、毎日の  
ようにある事を繰り返してる。

それは、地下に居るフランへの夜這いだ。夜這いと言っても、単純  
な性的目的でもない。フランには私の性的嗜好を抑えるために、  
ちよつと激しい遊びに付き合ってもらってる。吸血鬼こそできる、激  
しい遊びを。

「??フラン、起きて。早く起きてくれないと、やつちやうわよ?」

フランの上に馬乗りになって、その頬をぺちぺちと叩き、文字通り  
無理矢理叩き起す。

「んあ??お姉様?? あー??」

起こされたフランは不機嫌そうに、何かを察した声を出す。そし  
て、呆れたような、とても疲れ切った声で話し出した。

「連日だしさ、今ってまだ昼くらいだよ? こんな時間からするの  
? ??別にいいけど、あんまり本気でできないよ? 多分、スロース  
タートになるだろうね。まだ気分は乗ってないし」

「むう??. まあ、ともかく弾幕はいいとして、素手ですか? それと  
も、武器使う?」

「??素手で。武器よりも素手の方がお姉様に勝つ可能性高いし」

「そう。なら、早く立って。もう我慢できないの」

私は所謂、アクトモフィリア身体欠損性愛と言われる性的嗜好を持つてる。最近では  
毎日のようにその欲求を我慢できなくなり、フランに発散させても  
らってる。こんな事を頼めるのは同じ不死性を持つフランだけだし、

行き過ぎた時、私を抑えられるのもフランだけだったからだ。

ちなみに、身体欠損なんて怖い文字が入るが、私のはそこまで酷くないと思う。ただ、自分や好きな相手が血を流したり、傷付いたりしてるのを見るのが好きだ。または、血濡れた姿なら、尚良い。

「もー??だからって、こんな時間に頼まないでよ。ふあ??。眠いからさ、目が覚めるまでは好きにしていよいよ。最悪殺してもいいから。ま、殺せるならね」

挑戦的な笑みを浮かべ、あからさまに攻撃を誘う。だが、私としてはフランを殺すなんて事はしたくない。だけど、傷付いて血には濡れてほしい。この矛盾した思考はどうして生まれるのか。

「言うじゃない。でも、殺すなんて勿体無い事はしないわ。じっくりゆっくりしてあげるわ。フランは私だけのモノなんだから」

「ふーん。妹の事をモノとか言うんだ。これは許せないなー。??お姉様、早く、私と遊ぼ?」

「ええ、分かったわ。??痛みで気絶する前に、降参くらいは言いなさいよ」

覚悟を決めたフランの顔を見て、床を蹴って瞬時に距離を縮める。フランの首筋に爪を尖らせ手を伸ばすも、フランは私の手を掴み取って爪を立てる。そこから血が流れ出すも、フランは離さそうとしない。

それどころか、空いてるもう片方の手で私を引き寄せ、互いに逃げられないような状況を作り出す。その時のフランの顔は、不気味に口角を吊り上げていた。

「お姉様ア??。痛い?。ねー、痛いよね?。これでも嬉しいの?。こんなにいっぱい血が出るのに。それでも私が好きー、とか言えるの?。っていうかさ、弱過ぎない?。お姉様って私より年上なのに、こんなに簡単に掴まれて、怪我しちゃうの?。」

「そうねえ??好きだけど、少しイラつくわね」

「ん??あっ」

フランの足を自分の足で絡め取り、フランの方へと体重をかける。すると、フランは呆気なく背中から倒れてしまい、尻もちをついた。

そのまま何もしないはずはなく、私は更にフランを倒して馬乗りになる。

そして、仕返しと言わんばかりに離れたフランの両手を爪を立てて握り締めた。

「いったア??。あ、捕まっちゃったね。??で、ここからどうするの？」

このまま手足でも切断する？ それとも、首筋でも噛む？ 妹を血で染めて喜ぶ変態さんだもんねー」

「口の減らない妹ねえ?! ??いや、そうだわ。フランはどうしてほしいの?」

挑戦的な挑発を繰り返す妹にそう尋ねると、意外そうな顔をして戸惑いを見せる。が、すぐに平常時に戻ったらしく、小悪魔的な笑みを浮かべていた。

「??キスして。シスコンなら、できるよね?」

「そう言う貴女も求めてるならシスコンよ?」

「え? 何か悪い? 私はお姉様の事好きだよ。たまにこうして殺し合いみたいな事するけど、お姉様の好きって気持ちは伝わってるしね。だけど、もう少し控えめがいいかな、私はね」

うん、私も少し変わった性癖だと思ってるけど、これが好きだから仕方ない。我慢すれば、後々取り返しのつかない事になる未来が見える。だから、こうして相手をしてくれるフランが好きだ。誰よりも、家族という枠組みを超えて、心から愛してる。

悪魔だからか、たまに嘘をつくのはどうかと思うけど。今だって殺し合いを楽しんでるくせに、控えめな方がいいとか矛盾した考えを言ってるし。

「??お姉様、早くして。早くしないと、腕を破壊して押し倒すよ?」

「あら、こわいこわい。そんなに急かすなら、止めても気の済むままでするわよ?」

「へー? 私はお姉様の方が先に落ち——んう??っ!」

話の途中でも気にせずにはフランと唇を重ねる。抵抗できないようにフランを掴んでた手を腕から離し、代わりにフランの顔を抑える。それに対してフランは真正面から立ち向かう意思を示すように、私の

首に手を回して逃がさないように引き寄せてきた。

そして、数秒経つ事もなく、唇よりも舌同士が触れ合う機会が多くなった。互いに絡め合い、次第に呼吸も困難になってくる。それでも体力が持つ限りはやめずにいると、いつの間にか私もフランも涙目になっていた。苦しさと快樂。その矛盾した感情は混ざり合い、溶け合っていた。

たった数分。その時間はとても長く感じる。気付けば、最早フランに負けないという意地だけで戦っていた。そうした時間が続き、いよいよ耐え切れなくなっただと思つた時、フランを抑えてた手を離すが、それとほぼ同時。いや、僅かにフランの方が早く私を突き放した。「っんう??ふ??あっ」

「んうっ?! はあっ、はあっ??はあ??わ、私の勝ちね!」

「はあ? お姉様の方から逃げたじゃん! それで自分の勝ちとか何言ってるの?」

「フランの方から突き放しておいてよく言うわね? 潔く負けを認める事も大切よ?」

小悪魔的な笑みは何処へやら。フランは年相応の怒つた顔で私を睨んでいた。多分、私も今は同じ顔をしてる。それでも嫌いというわけじゃなく、むしろ互いに気持ちをつかっているからこそ、相手を睨み付けていた。

「??もう一戦しよっか。次は体力が尽きるまでね」

「いいじゃない。今度こそ、白黒はつきりさせてもらうわ」

「ふん、今だけだね。好き放題言えるのは。??でもさ、その前に??」

「へ? どうしたの?」

フランは顔を真っ赤にして、恥じらう姿を見せる。とても奇妙だ。いつもはそんな顔をしないのに、感情が高ぶりすぎて、おかしくなっているのかしら。

「??殺り合う前に、もう1回だけキスしよ?」

「貴女の方が変態さんだったわね??」

「お姉様にだけは言われたくない。そんな事言っていると舌噛むよ?」

「噛んだら血を吸い尽くすわよ?」

挑発し合いながらも立ち上がり、軽く二度目のキスを交わす。そして、それが終わると距離を置く事もなく、フランの皮膚に爪を突き立て、それを合図にそのまま2戦目を始めた――

――咲夜??紅魔館、地下室にて――

「はあ??仲が良いのか、悪いのか??」

目覚めてすぐにお嬢様の部屋へと赴き、誰も居ない事で察して地下室に来了。

地下室の床に広がるのは真っ赤な血の海。掃除するのも大変だが、ベッドの上で仲良く寝る2人を見ると、どうしてここまで血を流す結果になったのかが分からない。

むしろ侵入者でもやって来て、2人に殺されたと見る方が辻褄が合いそうだ。しかし、それは2人の切り刻まれた血だらけの服を見ると合わなくなる。

「咲夜も大変ね。後始末が」

いつから居たのか、扉の前にはパチュリー様が立っていた。パチュリー様の目線は呆れた様子で2人に向いてる。

「まあ、はい??。お二人共、仲は良いのに、どうして殺し合うのですよ  
うか? それが私には分かりません」

「そうねえ??これは私の考えだけ??2人とも、依存してるのよ」

返答が来るとは思ってた質問に、答えが返ってきた。どういう事かと頭を傾げると、続けてパチュリー様が口を開く。

「レミイはそういうのが好きっていうのもあるけど、その性癖に耐えられて、気軽に頼めるのはフランだけ。それを心の中で理解してるから、結果的に依存してるんだと思うわ。もちろん、恋愛感情はあるだ

ろうけど??。フランもフランでそんな姉に『好き』で付き合ってる節があるし、狂ってるわねえ?」

正しくその通りとは思いますが、どれだけおかしくても私はこの方達に仕える身。下手な事は言えない。もし言えれば??何とかなるかもしれないけど、恐ろしい恐ろしい。

「でも、2人とも幸せそうだし、本当に殺し合うよりはいいじゃない。私はそう思ってるわ」

「それはそうですね??はあ。先に掃除を済ませますね」

「ええ。終わったたら、朝食を図書館に持ってきてちょうだい」

「ここまで来たなら食堂に来てもいいのでは?」

それにしても、こんな服は汚れてるのに、2人の身体には傷一つ見当たらない。吸血鬼の再生速度は恐ろしい程に早い。それこそが、2人が深く考えずに殺し合う理由なのだが。それでも私は、幸せそうな2人が見れるなら、それでいい。何より殺し合ってる時の2人は、楽しそうで、嬉しそうだから。

心の中でひっそりとそう思いながら、片付けを始めた――

## 過去編

### 18話 「過去——切っ掛け」

——レミリア??紅魔館、地下室にて——

「ううん??お姉ちゃん??」

すっかり疲れ切って眠ってしまったフランの隣で、その頬に手を触れる。寒そうで寂しそうな身体に毛布で覆い、腕を回して包み込む。未だ幸せの余韻に浸る妹の顔は至福に満ちていた。それを見てるだけで嬉しい気持ちになり、本当に昔と変わったな、と改めて思う。否、遙か昔に戻ったと言った方が正しいのかもしれない。今よりも小さく、純粹なあの頃に。

とても喜ばしい事だ。それが意味するのは彼女もようやく、本当の意味で吹っ切れたという事だから。なんて考えてるうちに睡魔に襲われる。フラン同様疲れていた私は耐え切れず、妹に身を寄せた。

「??フラン、おやすみ」

最後の挨拶を告げ、重い瞼をそつと閉じる。

——過去の記憶——

「お姉ちゃんー!」

それは昔の話。フランが私に甘えて「お姉ちゃん」と呼び慕っていた遙か昔の記憶。もう数百年も昔の事なのに、つい昨日のような新しさを感ずる記憶。それはその記憶が忘れる事ができない辛い記憶だからか。それとも、忘れてはいけない大切な記憶だからなのか。

「なあに? どうしたのかしら?」

「いっしょに遊ぼう！」

「ええ、いいわよ。何して遊びたいの？ お姉ちゃんにできる事なら、なんだってしてあげるわ！」

その時はとても幸せだった。能力はまだ使えずにいたものの、両親はとても優しく、その愛を私達2人に平等に注いでくれた。前世でよく聞くフランだけを除け者にするようなゲス野郎じゃなかったのは、私にとってもフランにとっても、とても嬉しい事だった。と言っても、それは歪な翼があってもフランに狂気が現れず、未だに能力が発現しなかった影響もあるのだろう。

フランに能力と狂気がなければ、ただの天使のように可愛い女の子。吸血鬼だから他より力は強くとも、意外と力の制御はできてるから問題はない。容姿中身は少女そのものだった。

——探検ごっこがしたいな——

そんな毎日が充実していたある日、その出来事は起きた。私やフランの運命を変える出来事。あまりにも突拍子で、なんの前触れもなく、それは訪れた。

「探検ごっこがしたいな！」

「??え?」

「えーつとね、館の中を歩き??お姉ちゃん?」

その出来事とは——能力の発現。突然頭痛がしたかと思えば、フランのその言葉が、今の光景が脳裏をよぎる。前世の記憶を持っていた私はその謎の光景を理解できた。数秒先の未来視と微力ながらも、能力が発現したのだと。

「フラン！ こんなところに居たのね！」

「あ、お母様! どうしたの?」

唐突な能力の発現に呆然としてしていると母が来た。私とフラン、どちらにも似ない真っ白な長い髪に雪のような肌。目は私達と同じ真っ赤だけど、少し明るい。今思えば、母は俗に言うアルビノだったのかもしれない。詳しい事は聞きそびれたから分からないけど。

「どうしたのじゃないでしょ。今日は一緒に勉強する日よ? レミイと仲がいいのは良い事だけれど、勉強もしないと将来大変よ」



「えー！ 勉強つまんなーい！」

「全く、聞き分けの悪い子ねえ?。明日はいっぱい遊んでいいから、今日は頑張りましょ?。」

「今日お姉ちゃんとお遊びたいの!。」

嬉しい事に私のために駄々をこねるフランに母はため息をつく。そして、眺めていただけの私の方へ振り返ると自分に呆れた顔になりながらも口を開いた。

「もう?。レミイからも言っただけで。残念ながら私の言う事よりも貴女の方がよく聞くとと思うから」

「う、うん。??フラン。勉強しよ?。頑張ったら、貴女のお願いごと、なんだって聞いてあげるわ」

「ほんとに?!!」

フランの目付きが変わる。嫌々だった顔は甘えた表情へ変わり、その目は飢えたように上目遣い。物を欲しがると子供のように。

「ええ、本当よ。何でもあげるし、やってあげる」

「なら、約束ね! 絶対だよ!」

「うん、約束。だからね、勉強も頑張つてね」

「がんばる!!」

元氣よく頷き返すと、脇目も振らずに一目散に自分の部屋へと走っていった。それもとても幸せそうに、楽しそうに。

「ありがとうね、レミイ。いつも助かってるわ」

「ううん、フランのためだからいいわよ。彼女のためなら命だって賭けるつもりだから」

「責任感が強過ぎるのも考えものだけれど??私が生きてるうちは問題ないかしら。レミイはフランよりも勉強がよくできてるから、そのうち教えるって事も考えていいかもしれないわね。その方がフランも集中できるでしょうから」

昔は何故こんなにもフランが私に懐いていたのかは分からない。もしかしたら、何か切っ掛けがあったのかもしれないが、それは覚えてないし思い当たる節もない。ただ、その時はとても嬉しかった。ただそれだけはとても強く覚えている。

「じゃあ、そろそろ行くわね。フランが待ちかねてるでしょうから。レミイ。また後でね」

「ええ、また後で」

母と別れを告げ、私はその場を後にした。この時は思いもよらなかつた。

私の能力の発現が切っ掛けで、この先の私の——フランの運命を大きく変える、大事件が起きようとは——